

英語教師としての佐々木邦

藤 井 哲*

はじめに

筆者自身には英語教師としての経歴が通算で 40 年ほどあるが、いままでに取り上げてきた教科書には傾向のようなものがあった。すなわち 5W1H 中心の時事ネタや、1+1 が 2 でしかない理系の文章、感情より勘定のビジネス英文を選ぶことがほとんど無かった。教える方も教わる方も学期途中で飽きてしまうからである。それに、無表情で事務的な文章しか読み解けない英語能力では、英語が用いられる職に就けたとしても、将来的には人工知能にアゴ(?) で使われる立場に追いやられてしまうであろう。敢えて理念倒れのようなことを言うならば、好奇心と向上心と想像力に恵まれているはずの Homo・Sapiens が外国語に親しむということは、本文の行間を読み取って絶妙な表現と微妙な意味合いに感応できることであると考えたい。そうした能力においてこそ我々は人工知能に対して優れるのではなからうか。つまり、広い視野を保ちつつ、言葉の論理性を分析できる思考力を踏まえながら、想像力を縦横に発揮できる言語感覚を養うことが、高等教育機関の外国語教育の役割であるように思えるのである。

名目的には大学として分類されている職場で、「英語」という必修科目を担

* 福岡大学人文学部教授

当してきた筆者は、教材には Mark Twain (本名 Samuel Langhorne Clemens, 1835-1910), P. G. Wodehouse (1881-1975), James Thurber (1894-1961), Paul Gallico (1897-1976), Roald Dahl (1916-90) 等々の (ときにはブラックな) ユーモアを得意にする小説家や, George Mikes (1912-87), Richard Armour (1906-89), Richard Lederer (1938-), Terry Deary (1946-) といったユーモア随筆家や, William S. Gilbert (1836-1911) と Arthur S. Sullivan (1842-1900) のコンビによる comic opera を積極的に選んできた。行間を探る面白さを受講者に感じてもらおうとの思惑があったからである。学生から「あ!」と反応があったり、「な～るほど」と頷いてもらえたりすると、教えることを愉しめたものである。時には予想外の読みを示す学生もいたりして、こちらが「う～ん」と唸られる場合もあった。かつてはそんなこともあり得たという、今はもう昔の話である。¹

ユーモアを基調とした文学的文章に取り組むことで英語の読解力を確かなものにしてしようという発想には、当然のことながら偉大な先達があった。今からおよそ一世紀前に、「国際マーク・トゥエーン協会」という随筆²のなかで「私はもうユーモアでないと味へない頭になつてゐた」と、カミングアウトしていた英語教師がいた。英文学者というよりは大衆小説家として知られていた佐々木邦 (1883-1964) のことである。彼は、山の手の中流家庭に生活する小市民たちをユーモアたっぷりの筆遣いで明るく共感的に描いた小説を、よくもまあ種切れしないものだと呆れさせるほど数多く執筆して、明治～大正～昭和時代を通して老若男女に親しまれた、いわば国民的作家であった。昭和初期にまとめられた彼の全集 (1930) は売れに売れて、全8巻の予定が配本途中から10巻

¹ 最近では、論理的思考力や想像力を働かせる習慣を喪って、スマートフォンから眼と手を離せない学生(?)が増殖している。学ぶ意欲にも能力にも欠ける者に外国語科目の受講を強要する形式主義が、大学の授業を不毛にしてきたように思えてならない。

² 佐々木の随筆には短いものが多いので、短い作品からの引用では原則として頁表示を省略した。

に変更されたほどであった。戦後にも佐々木は愛読され続けており、筆者が学生であった頃には第二次の全集が全10巻+補巻5で刊行された。1974~75年であったから、東京でオリンピックが開催されて既に10年、大阪での万国博覧会から5年が過ぎていたほど、現代に近い時代での話である。

もともと佐々木は実業界に就職したかったらしいが、日露戦争後に不景気の煽りを受けて挫折してしまった。それならば（旧制）中学校で英語教師にでもなろうと進路を変更したが、当初にはそのつもりがなかったせいで教員免許の取得を怠っていた。そのため、無免許でも教えさせる釜山の商業学校まで落ちちしてやっと教諭のポストを得て、そこで苦節の2年と1学期間を忍んだ末に、岡山の（旧制）第六高等学校に転任した。人脈にも恵まれたとはいえ、異例の大出世であった。ところが岡山では冷遇されて8年後には退官した。かつて短期間学んだことのあった慶應義塾大学予科に教授として採用されたからである。そこに12年勤めている。彼の最終学歴にあたる明治学院高等学部にも出講して英語を教えながら、英米を中心としたユーモア作家たちを文壇に先駆けて旺盛に翻訳してきた。その彼が教職から退いて、フルタイムの小説家に転向したのは1928(昭和3)年、すなわち44歳の時であったが、その時点で既に文筆家としての経歴の前半が終わっていた。専業作家になってからは軸足を翻訳から創作に移すようになり、ユーモア小説を精力的に発表していった。そして彼が1964年に81歳で死去するや、『英語青年』は同年12月号を以て追悼している。彼が英語教師であったことを当時の英語界が忘れていなかったからである。

平成時代の今日でも、佐々木が英語教師であったことは一部の同業者の間では知られていて、作品も親しまれているようである。偶々2014年が没後50年目で著作権保護期間が終わったせいもあり、国立国会図書館の「デジタルコレクション」や「近代デジタルライブラリー」が佐々木による邦訳書を公開しつつあり、民間の「青空文庫」などにも小説が着々アップロードされるなど、彼

の作品に親しみ易い環境が整備されようとしている。そこで筆者は、この好環境に便乗して、彼の英語教師としての側面を捉えた論考の執筆を思い立った。彼の経歴上の節目を目安にして、全体を第I～VI章に分け、作品ちゅうでの言及や既存の研究から、あるいは気さくに内輪話を耳打ちしてくれる月報類にも情報を集めながら、教壇に立つ彼の姿を想い描いてみたい。³ またその際には、同じ業界に身を置いてきた筆者の経験が彼の心境を忖度するのに役立つかもしれないし、あるいは見当違いになるかもしれない。同業者諸氏よりの御高見を賜れば幸いである。

佐々木の英語教師としての仕事は、学生の耳を通り抜けてそのまま消滅してしまうものばかりではなかった。折に触れて英語学習誌などの雑誌や新聞に執筆していたようだ。しかし何よりも彼は、並の英語教師にはちょっと真似できない勤勉さで、何冊もの英書を邦訳していた。但し翻訳と謳ってはいても、外国文化や習慣に馴染みが薄い当時の読者を戸惑わせないようにとの配慮から、翻案に傾くことを彼は厭わなかった。そのせいか、精確な翻訳を尊重するアカデミズムからはあまり評価されなかったようである。しかし読みようによっては、原文から乖離した部分にこそ彼の創作感覚のようなものを抽出できるのではなかろうか。本論考では、従来の全集に収録されなかった英語絡みの文章を集めたいわば『施注版佐々木邦訳集』のようなものがあつたら面白いであろうなどと空想しながら、筆者が掘り起こしてきた収穫を本文で報告し、各章の末尾では《翻訳・翻案作品》についての書誌情報を記述してみた。⁴

³ 佐々木の英語教師としての経歴面については文献に拠って迎えることを基本としたので、「引用」(典拠)といった記述形式が頻出する。また本文は関連資料の書誌も兼ねているので、論述の流れを保つ必要から、時に記述が重複することを厭わなかった。

⁴ 【文献番号】は刊行の西暦年の下2桁+月(但し10～12月はX～Z)+識別のための4桁目の数字とした。なお引用に際しては、当時一般的に使用されていたルビを原則的に省略した。

I. 1883（明治16）年～1905（明治38）年 誕生～明治学院高等学部卒業（21歳）

佐々木邦は、地方で大工をしていた林蔵の長男として1883(明治16)年5月4日に「伊豆の三島市と駿河の沼津市の間の村」⁵に誕生した。林蔵は後にドイツへ派遣され、帰国してからは洋行帰りの建築技師として、邦が7歳の時に一家で上京した。次男の二郎は後に日本聖公会の京都管区主教になり、三男順三は英文学者となって立教大学総長も勤めた。名古屋で裁判官をしていた四男義朗は40歳で病没した。息子たちが揃って優秀であり仲が良かったのは、林蔵に進取の気性と教育への理解があったからであろう。

邦は芝の名門^{ともえ}輶絵小学校の高等科を1895年に修了し、神田乃武校長の正則中学校に短期間ながら在籍し、同年に海軍予備校（後の海上高校）に転学するが1年足らずで休学してしまった。鳥越信の「聞き書」に拠れば、坪内逍遙が修身を教えていた早稲田中学校に再入学した。そこで一年生を了えたものの1898年に病気で2年間休学した。幸いにも1899年には青山学院中等科編入試験に合格して四年生に受け入れられた。はじめのうちは「英語は大へんおくれている、英人の教師にずいぶん叱られ」（pp.182-183）たらしいが、英語との関わりを深めるようになった。型通りに五年生を了えて卒業したのが17歳であったから、年齢的には順調な進級であった。同校の高等科に半年在籍してから、翌1902年4月に慶應義塾大学理財科予科（二年制）に入学したのは18歳の時であった。

1903年11月まで予科に在籍したが、日記には「慶應在学は到底いまの財政の許さぬ所なり。止むを得ずば、九月より転校し、英語を専門に学び、中学教師にても為しながら大勉強せんか。」⁶と誌されているらしく、三年制の本科へ

⁵ 『人生エンマ帳』（東都書房、1963）のための「まえがき」に拠る。

⁶ 松井和男, p. 111. 佐々木も随筆「奇縁」に、「もし実業界に入れなかったら、中学

進んでも学資が続きそうになかったので慶應を退学してしまった。中学の英語教師になるのに大学卒業は必須でなかったから、青山学院高等科の二年生に復学できれば1年半後に卒業できるであろうと、手続きをしに「三田の下宿を出ると、雨がポツポツ降ってきた。そこで近くの明治学院へ行つて見ようと思った。」⁷という偶然の成り行きで、明治学院高等学部の二年生に入学してしまった。そこは英語教師島崎藤村を1891(明治24)年に輩出していたし、英文学者の馬場胡蝶や戸川秋骨そして石川林四郎も卒業していたくらいに、英語教育に力を入れる校風であったので、佐々木にとっても「外国人教師のもと、本場の英語に親しんだ影響が大きい。言語の背景に英米の風物、生活、人情が、好奇心と憧憬を誘った」⁸ようである。予定通り1905(明治38)年に彼は高等学部を卒業した。

もともと慶應の理財科を出て横浜の貿易商社に就職したかったのであるが、彼が英語教師志望へと舵を大きく切るようになった背景には、学資の問題で退学するよりも以前に、彼をユーモア文学へ惹き付けていった出遭いも影響していた。それについての彼の弁を随筆「国際マーク・トウェーン協會」から、やや長いので、刈り込みながら引用しておきたい。

私はマーク・トウェーンのお蔭でユーモア文学の方へ向いた…。二十歳で慶應の理財科豫科に通つた頃、英語が好きで、他の學科は餘り顧みなかつた。理財科に入るくらゐだから、文學青年では無論なかつたが、文學は嫌ひでな

校の英語の先生になれるという考えもあったのだった。」と書いている。

⁷ 「教壇から創作へ」, p. 351. 鷲山弟三郎『明治学院五十年史』(明治学院, 1927年11月3日)にも窺えるが、英語力を伸ばすのに恰好の環境を佐々木に提供できていた。

⁸ 小坂井, p. 51. 第二次全集『第十卷』所収の小説「心の歴史」で、「ミッションスクール」の章が想像させるところでは、英会話教師が「明眸皓齒のプロンド美人」(p. 125)だったことが励みになったようだ。更に、そこでの寄宿生活からキリスト教に親しむようになり、その影響で彼の弟が二人とも受洗したが、邦が聖公会に入信したのは死去する直前になってからであった。

かつたのだらう。しかし英語が圧倒的な興味だつた。折から原抱一庵といふ文士がマーク・トウエーンのシーザー暗殺といふ短篇を譯して、朝日新聞に掲げた。⁹ 私は恐らく、それによつてマーク・トウエーンが存在を知つたのだらう。… その一文を山縣五十雄氏が批評して、喧嘩が始まつた。…

抱一庵氏は完全に敗北した。… その折、山縣氏はマーク・トウエーンの記事はナカナカむづかしくて、好い加減な英語の力で読みこなせるものでないと書いてゐた。これが私への刺戟になつた。よし、マーク・トウエーンを読んで見よう。と。

早速、手に入れたのは [The] Innocents Abroad だつた。或は短篇集だつたかも知れない。… よく分るのは驚喜だつた。おれの英語も相應なものだと思つた。その後、慶應の理財科から明治學院へ轉學したのは種々の都合もあつたが、好きな英語で身を立てたいといふのも一つの考慮になつてゐた。…

その後兩三年たつて、夏目先生が猫を書いた。續いて「坊つちやん」が出た。マーク・トウエーンで養はれて來た私は夏目先生のユーモアが實に有難かつた。日本にもマーク・トウエーンが出たと思つた。兩書は耽讀したものだつた。私はもうユーモアでないと味へない頭になつてゐた。

親からの仕送りは滞りがちであつたから、明治學院では苦学を強いられた。佐々木は自らの学歴を顧みて、「滿二年とゐた學校はない。… 若し私が中學校高等學校大學と規則正しく落ちついて教育を受けたら、學者として相當のものになつてゐただらう」(p. 349) と「教壇から創作へ」で回想していたほどであるから、己の英語力には自信があつたようだ。その学力を見込まれてか、卒業もしないうちから「先輩が世話をしてくれて、或少年雑誌へ翻譯を出した。

⁹ 佐々木が慶應予科に在籍していた頃、1903(明治36)年4月6日の『東京朝日新聞』に載った「特別通信 該撒慘殺事件」のこと。原抱一庵はその後発狂して翌1904年に精神病院で歿した。

これが原稿稼ぎの手初めだつた。…それから翻譯仕事は何でも引き受け」(p. 352) るようにして、将来の教師へ向けた修行を積んでいった。世話をしてくれたのが先輩であったとするならば、同校の教授皆川正禧^{まさき}(後述)ではなさそうだから、4歳年長で同窓の石川林四郎であったか、あるいは別の先輩であったのか、判らない。佐々木が何を翻譯したのかとか、【1031】所収の翻譯物との関連の有無についても、筆者の知る限りでは究明された形跡は無いようである。

Ⅱ. 1905 (明治 38) 年～1909 (明治 42) 年 就職浪人～釜山時代 (21～26 歳)

佐々木邦が1905(明治38)年3月に高等学部を卒業した明治学院は、キリスト教のミッションスクールであったために、「メイジガクイン、メシガクエンという洒落^{しゃれ}のような伝統」が堅持されていて「代々の卒業生が就職にあぶれ」たくらいであるから、「日露戦争直後の不景氣最中」ともなれば、いくら英語のできる彼でも実業界に就職口を得ることは困難であった。¹⁰そこで、研究生の名目で学院の寮に住まわせてもらいながら¹¹、アメリカから来日した宣教師に日本語を教えたり、在学中から通っていた三田聖坂のフレンド教会に着任した Gilbert Bowles 牧師のために文書の翻譯をしたり、彼に推薦されて水戸市のフレンド教会附属英語学校でも教えたことがあったが、教会の仕事もさせられるとあって1年で辞めてしまったようである。¹²

¹⁰ 第一次全集『第一卷』の「はしがき」、および『人生エンマ帳』(1963)の「まえがき」等。

¹¹ 第二次全集『第十卷』所収の小説「心の歴史」ちゅうに「行き当りばったり」の章を読むと、この辺の事情を想像できる (p.136)。

¹² 松井和男, p.151. また、第二次全集「月報第1」に佐々木順三が寄稿した「ユーモア第一歩」参照。

しかし佐々木は、「教壇から創作へ」でも回顧しているように、就職浪人中の「二年間遊んではみなかつた。自活の爲に、翻譯をやつた。代譯だ。五六冊やつた。皆文學書だつたから、實に好い練習になつた。…[尾崎]紅葉山人の言文一致を熟讀して、調子を覺えることに努めた。」(p. 354) という旺盛さで、英語教師としての基礎体力作りに励みながら、未来の小説家たるに相応しい文体を磨き修練も積んでいたことになる。¹³ 第一次全集の「月報第一號」に載った「マーク・トゥエーンと夏目先生」で彼は述べているが、漱石の高弟で明治学院教授であった皆川正禱¹⁴ も、就職浪人中の佐々木に翻譯のアルバイトを斡旋したのみならず翻譯法も指導してくれたらしい。代訳であったから名前が出されることはなく、訳出された作品名も確認されていないようであるが、どれも英語で書かれた西洋の家庭小説であり好評でもあったらしい。こうした経験から、「無理なことも生活のためとなると、やっぱりやれば出来るのだ。」との自信を彼は獲ることになったのである。¹⁵

代訳者に甘んじていた彼に、Mark Twain に次ぐ第二の出遭いが訪れた。再び「教壇から創作へ」によると、「或日、丸善へ行つて、A Bad Boy's Diary といふ書物を見つけた。買つて歸つて讀んで見たら大變面白かつた。私はそれを譯して代譯の仕事をさせてくれる先生に示したら、大層褒めてくれた。」(p. 354) という展開が彼の人生に転機をもたらせた。家庭小説は訳し慣れていたから、(恐らく同じ調子で) 翻案に近い感覚で一気呵成に抄訳したのであ

¹³ 鳥越信の報告によると、佐々木は「日本文学も少しは読みましたが、翻譯の参考にする程度で。尾崎紅葉の「夜の女」などは参考になりました。文章がうまいですねえ、尾崎という人は。うまいといえば二葉亭四迷の「其面影」はうまいですね。あれは直しようがありません。」(p. 183) と語った由である。

¹⁴ 近藤哲『夏目漱石と門下生・皆川正禱』(福島：歴史春秋出版、2009年7月11日)に拠ると、佐々木が卒業した翌年から始まる皆川の日記が8冊現存するらしいので、佐々木についての言及が含まれているかもしれない。

¹⁵ 松井、pp. 151-152. 『人生エンマ帳』(1963)の「まえがき」。また第一次全集「月報第七號」の「佐々木邦先生(二)」に、『いたづら小僧日記』以前にも「専ら翻譯につとめ、三四冊別人の名前で出版された。それはたまたま小説ばかりであつた。」とあるが、書名は伝わっていない。

ろう。丁度その頃に、彼は教師の職を雌伏の2年を経た末に得ることができた。更に、「悪戯小僧日記」が与謝野鉄幹主宰の『明星』に佐々木邦の名前で連載され始めた。但し、教鞭を執るようになって半年後の1907(明治40)年11月からであったが。

佐々木が英語の教諭になれたのは1907年4月で、釜山の居留民団立商業学校においてであった。当時中学校で教えるには帝国大学か高等師範学校を卒業する必要がある、中学卒業と認定されなかった明治学院¹⁶やその高等学部出身者は中等教員検定試験に合格する必要がある。ところが実業界を目指してきた佐々木は、教員試験を受けていなかったために無免許状態だったのである。それでも外地へ出れば融通が利いたのであろう。

無資格の身であったので、「實は厭だつたけれど、卒業後二年間も口がなかつた爲、仕方なしに都落ち」を受け入れることに思い定め、隨筆「ウエブスターの記」の伝えるところによると、一抱えもある *Webster's International Dictionary* (1890年版?)の「中古を買つて、風呂敷包みにして新橋驛から出發し」、一路釜山へ赴いた。しかし「學問をやるものが植民地にゐては仕方がない」し、のんびり構えていては東京で通用しなくなってしまうとの危機感から、「その頃ほど勉強したことはないと思ふ。朝鮮にゐながら釜山以外は何處も知らずに歸つたくらゐ時間が惜しかつた。」といった毎日で、職場に愛着を覚えられないはずもなかった。幸い1909年8月には内地に呼び戻されたので、2年と1学期間を勤めてから脱出を果たしたことになる。しかし彼にとって不毛の2年間ではなかった。赴任半年後には筐底の「悪戯小僧日記」が『明星』に掲載され始めた。教職を求めて鶴岡から釜山に来ていた服部小雪を妻に娶っていた。愛用の *Webster* に潜ませた小雪宛の求婚の手紙が効を奏したらしい。「教

¹⁶ 1899年の文部省訓令第12号が旧制中学校での宗教教育を禁じたため、キリスト教主義の明治学院を卒業した佐々木には旧制高校受験に必要な中学卒業の資格が与えられなかった。

壇から創作へ」に拠れば（書名は伝えられていないが）7～8冊ほど代訳もしたらしい（p. 355）。また、明治学院の『白金学報』に佐々木春川の筆名で何本か執筆している。更には、旧制高校への大抜擢が無資格という彼の負い目を一気に吹き飛ばしてくれたのであるから、結果的には幸運に恵まれた都落ちであった。

随筆「先生」に拠ると、佐々木教諭は釜山の商業学校でしばしば「教壇から黑板拭きを投げつけ」たそうであるが、彼の教え方はどうだったのであろうか。主任兼平教諭として「英語を教へる丈けなら大した苦勞もないが、事務が大變だ」（教壇から創作へ、p. 355）とか、「教室で英語の小説を教へたから、これが今日好い修業になつてゐる」（書物と私）とかくらしいが、本人は語っていないので教師像の具体的なところは判らない。しかし当時は今と違って教師が尊敬されていたので、「授業アンケート」のような陰湿な圧力もなかったろうから、次章で第六高等学校での彼の教え振りを参観すれば、遡って類推できるであろう。

ここでは、彼が釜山で買い込んだ書籍に関連して「私は英九和一だつたらう。和書も俳書丈けだつた。この故に私は英文學と日本文學の中何方が餘計無學かといへば日本文學の方が一層無學である。」（書物と私）と語ったことに注目しておきたい。彼は英語ばかりを勉強していたから、英語のこと以外に教室で脱線するための話題をほとんど持ち合わせておらず、ひたすら教科書を追うだけの授業をこなしてきたと想像できるからである。そうした偏りのゆえであろうか、後年の小説作品でも日本の文学や歴史に対する見識を窺わせる言及はほとんど見られず、彼にはもっぱらユーモア感覚と英米文学方面の雑知識で勝負する傾向がある。¹⁷ 外国語の学習には多大な努力と時間を求められるだけに、筆者（藤井）も同じ穴の^{むじな}貉なのであるが、往々にして英語教師は視野が狭くて円

¹⁷ 丸谷オ一が「佐々木はわかりやすく、おもしろく、バタくさい、新しいスタイルの読物を提供した。」（p. 227）と評した背景の説明になるのではないか。

満な教養と人間味とに欠きがちなものである。そうした密かな負い目が永らく英語教師たちに佐々木作品への共感を覚えさせ親近感を抱かせてきたのかも知れない。

佐々木邦の名前が添えられた「悪戯小僧日記」【07Y1】は、1907年11月から10回にわたって雑誌『明星』に連載され、半年後の1909年には、やはり原作者名は無いままで佐々木訳として単行本化された。本人が「非常によく賣れた。私が現にユーモア文學やつてゐるのは、その時に方向が定つたのである。」(書物と私)と述懐したくらいに、この処女作(?)は教師たる佐々木に将来の小説家誕生を約束することにもなった出世作であった。

その処女作が翻訳なのか創作なのかの帰属をめぐって以前には混乱もあった。第二次全集は「いたずら小僧日記」(正・続)を『第一巻』の巻頭に置き、同様の「おてんば娘日記」も『補巻四』に収録したが、尾崎秀樹は『第一巻』の「解説」で「おそらく翻訳の形をとった創作であり、持ちこむ際に無名氏著、佐々木邦訳としたのがそのまま普及したのではないだろうか」(p. 386)と推測して、「佐々木邦の文学の出発」を告げる作品と位置付けた。尾崎は『補巻四』の「解説」でも「実際には佐々木邦の創作であろう」(p. 390)との見解を示していたし、20年以上経った1997年の『思い出の少年倶楽部時代』に至っても「実際は翻訳の形を借りた創作で、佐々木邦文学の原形ともなった作品」(p.10)であり、「のちに数多く書かれた、市民的な良識と明るさに支えられた佐々木邦の明朗少年小説の諸特徴は、すべてかの『いたづら小僧日記』にふくまれていた。」(p. 13)との観測を示していた。佐々木自身が「無名の青年が、雑誌社に原稿を持ち込んでも、なかなか読んではくれない。ところが、翻訳だといえは興味をもってくれるからね。」と、指方龍二さしかたに語っていたからである。¹⁸これを丸谷オ一も踏襲し、新米教員が小説出版では教員室で憚られ

¹⁸ 「豊分居秘話」『大衆文学大系 22：佐々木邦・獅子文六集』（講談社、1973年2月20日）「月報22」, p. 3.

るから翻訳を装ったのではないかと考えた（p.226）。

ところが、である。『思い出の少年倶楽部時代』よりも以前に、ということ丸谷よりもずう～と以前の1991年に、堀部功夫が作者不明の *A Bad Boy's Diary* (1880) の存在を報告して、原文と佐々木の『いたづら小僧日記』とを入念に照合していたのである。下って2002年には石原剛が、それまで匿名にされていた原作者名を Metta Victoria Fuller Victor (1831-85) という米国の通俗作家 (dime novelist) であると特定して、更には『おてんば娘日記』【0972】の種本も同著者による *A Naughty Girl's Diary* (1883) であることを報告していた。両『日記』が翻訳作品であることは、既に研究者によって確認されていたのである。

佐々木は自身の判断で訳出箇所を選択し、再配列し、不徹底ながらも固有名詞や生活環境を日本風に移植して、当時著者名が秘匿されていた作品を翻案していたことになる。単行本『悪戯小僧日記』では「佐々木邦譯」とされている。両作品の他『グッド・ボーイ日記』【10Z1】等も収録しなかった第一次全集は、それらの日記物を翻訳と認識していたからであろう。しかし時代も下って佐々木が物故してからは、彼の作家経歴をスタートさせた一連の創作作品として目されるようになってしまった。しかし彼にしてみれば、オリジナル作品でなかったにしても『悪戯小僧日記』が成功したことで、小説や短篇を英書に捜して彼なりに愉しめるところを摘まみ食い式に訳出したり自由に加筆するという翻案の手法に、自らの才能を発見することになった。その結果として、創作作品においても翻訳を思わせる文体と雰囲気とが彼の持ち味として定着したのであるから、まさしく彼にとってのデビュー作ではあった。

当の佐々木は『悪戯小僧日記』【0951】のための「はしがき」で、「原書は無名氏著悪戯小僧日記といふ。是は其の所々を譯し出し、又自分の考へを加へて成つたものであるから、譯としては極めて不忠實である。さりとて著といつては不道徳になるから、兎に角譯として置いた。」と、原作品の存在をほのめか

しており、この翻案という手法についての認識も示していた。次の『續悪戯小僧日記』【0951】の「はしがき」でも、「是は『いたづら小僧日記』に譯し残した所から主に材料を取つたものである。」と認めていることから、彼には原作品を加工する便法に対してわだかまりが無かったことも窺わせている。

こうした便法より、*A Bad Boy's Diary* の場合、もし全訳すれば400字詰め原稿用紙で400枚ほどになろうが、佐々木の『悪戯小僧日記』では正篇【0951】と続篇【09X1】を併せても300枚弱にしかならないので、「不忠實」な抄訳であることは判る。そのいっぽうで、邦訳すれば10枚ほどで済む原文の第I章を彼は14枚（第二次全集『第一巻』でp.5~p.9上段第9行目）に訳出していることから、話題を取捨しながらも、必要があれば訳文を膨らませていたことも判る。堀部功夫の報告によると、「同工類話」が整理され「破壊的な大悪戯」や「政治的活動」が削除されて、各エピソードの繋ぎの記述と10件ほどの「小悪戯」が追加されているそうである（pp.147-148）。

『續悪戯小僧日記』【09X1】もそろそろ登場しようかという時期に、すなわち岡山の第六高等学校に転出する1909（明治42）年8月までの時期に、彼が出版した作品は翻訳ばかりであって、それも1909年に集中している。先ず4月の『法螺男爵旅土産』【0941】については、小坂井澄が「ビュルガーの原作を翻案した英書の訳で…邦の好みと志向にぴったりだった」（p.83）と紹介しているが、翻訳の底本は、後年に書き直された『ほら物語』【2691】の「はしがき」に拠ると、Gottfried August Bürger のドイツ語版（1788）ではなく、Rudolf Erich Raspe の英語版であったようだ。何食わぬ顔をして大法螺を吹く Mark Twain の tall tales を思わせる展開はなるほど佐々木好みであったろう。

踵を接するようにして7月に出版された『ドン・キホーテ物語』【0971】も、彼が随筆「不注意一束」のなかで「世界の傑作だからと勧められてスペイン語を知らない私は英訳から和訳を試みた」と回顧したように重訳であって、先ずは約150枚の抄訳として刊行された。【0971】の「はしがき」によると「目下

執筆中」であった“全部訳”も5年後に900枚強の規模で、皆川正禧の助力により出版されている。完訳と見做すには程遠い全部訳【1441】の「はしがき」には「成るべく日本の読者に分り易いやうにと心掛けて書いた」とあるものの、原作がどの程度刈り込まれたかについての実態はまだ明らかにされていない。

同月には『おてんば娘日記』【0972】も出版されており、その「はしがき」でも「原文に不忠實で、自分の考への多きを占めて」いて「創作としても構はない…原書に負ふ所は極く僅かであるから」と、限りなく創作に近い翻案作品であることが告げられている。『悪戯小僧日記』の姉妹篇だけあって、作中ではとうますじょうじ東益条治というバタ臭い名の英語教師が語源談義をしたり、「矢っ張り雪子さんの方が姉さんより綺麗」と妻小雪へのほのめかしが紛れ込んでいたりで、佐々木の翻案振りは愉しませてくれる。1917年には『縮刷合巻 いたづら小僧日記 おてんば娘日記』も再刊された。

この釜山時代の最後に、Mark Twainの短篇“Luck”(1886)を「運」【0973】と題して雑誌の7月号に発表していたが、これは原文に忠実な訳であった。表現に無駄のない短篇小説とあっては佐々木にも彼風の味付けに料理し難かったのであろう。彼は慶應在学中から「マーク・トゥエーンがよく分る。分るから得意になつて読み續けて」¹⁹いたのであったが、当時は「單に英語の研究と趣味から丈であつて、ユーモア文學をやる気は少しもなかつた」²⁰らしい。Twainは「無論面白いけれど、常にユーモアの努力をしていて、誇張や白々しいところが多い」と直感していたせいも、文学への傾倒には直結しなかつたようである。²¹その後皆川正禧から漱石を読むよう勧められると、「日本人である所爲か、私には夏目先生の初期の作品の方がマーク・トゥエーンのものよりもピントピン

¹⁹ 「はしがき」第一次全集『第一巻』, p. 2.

²⁰ 「マーク・トゥエーンと夏目先生」第一次全集『第一巻』「月報第一號」, p. 6.

²¹ 佐々木邦「Punch, 英国ユーモア」『英語青年』第104巻5号(1958年5月1日), pp. 34(258) - 35(259).

来る」²² と思えたのも道理であった。それ故であろうか、佐々木の小説世界に横溢するアツケラカンとした明朗さは、Twain の悲観的な諷刺よりもむしろ『猫』（1905-06）や『坊ちゃん』（1906）の諧謔の方に近いように感じさせるのである。

ところで、ユーモア小説を量産して晩年には紫綬褒章まで授けられたこの国民的作家の作風を面白くしている秘密は、漱石風の諧謔の他にもうひとつあることを、清水哲男が教えている。すなわち、彼の作品中に人物の顔、服装、日常生活があまり具体的に描かれないことに秘密があるらしい。²³ 例えば第二次全集『第八巻』に500枚近い「美人自叙傳」（初出1930）を読んでも、主人公がどのような美人であるかを教えてくれないから、読者は周囲の評判と彼女の台詞の言葉遣いを頼りに妄想を愉しめるといった効果である。なるほど翻案的手法においては、周辺の描写に深入りしないほうが訳者も描写の整合性に煩わされずに済むし、読者も軽快に読み進めるであろう。こうした積み重ねがあって、佐々木の作風はいかにも彼流に熟成していったのである。

無資格であったがゆえに外地にまで都落ちした英語教師が、副業の方で着実に実績を積み上げてこられたのであるから、「もう翻譯で食つて行けると思つた。…學校をやめる決心をした。」（教壇から創作へ、p. 355）などと気が大きくなり、釜山に居て腰が落ち着かないのも無理からぬことであった。「丁度そこへ明治學院の先輩石川林四郎氏が第六高等學校を去るに當つて私を後任に推薦してくれた」（p. 355）との朗報である。いよいよ内地からお呼びが掛かった。しかも中等教員の免許すら持たない佐々木に、当時全国に8校しかなかった高等学校からの招聘である。何といつても官立学校であり、辛抱さえしていれば恩給も付くし、ゆくゆくは勅任教授となって閣下と呼ばれる身分に昇れる

²² 「マーク・トゥエーンと夏目先生」第一次全集『第一巻』「月報第一號」、p. 7.

²³ 「佐々木邦ランドの楽しさ」『少年小説大系第21巻：佐々木邦・サトウ・ハチロー集』（三一書房、1996年6月30日）「月報29」、p. 3.

かもしれないのであるから、「教師をやめて翻譯をやる積りの私も食指大いに動いてゐた。」(p. 356) のも尤もな話であった。

《翻訳・翻案作品》

【07Y1】 佐々木邦 「悪戯小僧日記」 『明星』 東京新詩社 [1]：未歳第拾壹號 1907(明治40)年11月1日 pp. 63-73 / (二)：未歳第拾貳號 12月1日 pp. 46-51 / (三)：申歳第貳號 1908年2月1日 pp. 107-111 / [4]：申歳第參號 3月1日 pp. 60-63 / [5]：申歳第四號 4月1日 pp. 110-113 / [6]：申歳第五號 5月1日 pp. 110-117 / [7]：申歳第六號 6月1日 pp. 85-88 / [8]：申歳第七號 7月10日 pp. 61-64 / [9]：申歳第八號 8月10日 pp. 46-53 / [10]：申歳第九號 10月10日 pp. 44-50. 復刻版『明星(全百冊)』(京都：臨川書店, 1979年11月20日)に拠って記述した。

【原著】：Metta Victoria Fuller Victor, *A Bad Boy's Diary* (1880).

翻案的抄訳で、「教壇から創作へ」に拠ると、冒頭の400字詰め原稿用紙で40枚分を『報知新聞』の記者が持ち出したまま紛失してしまったらしいので(p. 354), 冒頭を欠いたまま150枚分が連載された。もっとも佐々木の孫にあたる松井和男は、「邦の知らないうちに、誰かが勝手に原稿を持ち込んだとしか考えられない」と推測している(p. 163)。【再録：0951】

【0941】 佐々木邦(譯述) 『法螺男爵旅土産』 内外出版協會 1909(明治42)年4月5日 《19×12 ㊦/ 83頁/ ㊦0.²⁵》。原稿用紙にして50枚の訳文に半頁大の挿絵8葉が不均等に配置されているので、雑誌連載を経ずに、始めから一冊の児童書(?)として出版されたのであろう。

【原著】：『はら物語』【2691】の「はしがき」によると、英語版である Rudolf Erich Raspe 訳 *Baron Munchausen's Narrative of his Marvellous Travels and Campaigns in Russia* (1785) を底本にして訳出したらしい。作品は変容し続

けて定本と呼べるテキストは存在しないのであろうが、新井皓士が Gottfried August Bürger のドイツ語版 (1788) から邦訳した岩波文庫 (1983) で照合してみたら、そのなかの半分強の話が佐々木訳にも順不動ながら認められた。枝葉部分は払われているが、固有名詞も含めて行儀良く訳出されているようだ。

【0951】：佐々木邦 (譯述) 『悪戯小僧日記』 (表紙：『いたづら小僧日記』) 内外出版協會 1909(明治42)年5月15日 《19×13 ㌘/ 194 頁/ ¥0.⁴⁰》。

原著については初出である【07Y1】で記述した。【07Y1】に欠けていた訳文の冒頭40枚分が、単行本化に際して新たに訳出され補填された。全訳であれば400枚ほどになろうから、200枚弱の本書は翻案の抄訳ということになる。それでも同年5月25日に再版、6月25日に三版、7月6日に四版と快調で、佐々木にとっての出世作となった。本書についての本人の弁は、

これは翻訳ですが作者は無名氏です。二十三の時[1905]に訳したんですが、私が無名だったために二十七[1909]になって本になりました。ところが当時これが二、三万も売れて、おかげでぼつぼつ仕事ができるようになりました。

であったことを、鳥越信は「聞き書」(p.185)で伝えている。同書の「出来るだけ逐次譯」が1915(大正4)年になって伊東六郎により『バッドボーイ日記』(高踏書房、405頁)として出版されたが、やはり原著者名は秘匿されていたようである。

【再録】：『(縮刷合巻)いたづら小僧日記 おてんば娘日記』弘學館 1917(大正6)年6月15日 pp.1-185。第二次全集『第一巻』(1974)。『いたづら小僧日記 おてんば娘日記』新学社 1975年4月1日 pp.7-149。

【0971】 佐々木邦 (譯) 『ドン・キホーテ物語』 内外出版協會 1909(明治

42)年7月26日 《19×12 ㇿ/ 148 頁/ ㇺ0.³⁰》.

【原著】：Miguel de Cervantes, *Don Quixote* (前篇：1605, 後篇：1615).

原典から全訳した岩波文庫(2001)の牛島信明訳は3,200枚程あるが、本書は150枚しかなく、15葉の素朴な挿絵が添えられた抄訳本。佐々木は5年後にも凝った訳文で900枚強の“全譯”版【1441】を挿絵無しで出版している。

【0972】 佐々木邦（譯述）『おてんば娘日記』 内外出版協會 1909(明治42)年7月27日 《18.5×12.5 ㇿ/ 124 頁/ ㇺ0.³⁰》. 【07Y1】 および 【09X1】 の姉妹作。参照した第三版の奥付に拠ると、初版が7月27日、再版が8月5日、三版は8月21日と「悪戯小僧日記」同様に版を重ねていた。

【原著】：Metta Victoria Fuller Victor, *A Naughty Girl's Diary* (1884). 原著は雑誌掲載だけだったのか、まだ書籍版を筆者は入手できていない。

【再録】：『(縮刷合巻) いたづら小僧日記 おてんば娘日記』 弘學館 1917(大正6)年6月15日 pp.283-400. 第二次全集『補卷四』(1975). 『いたづら小僧日記 おてんば娘日記』 新学社 1975年4月1日 pp.221-312.

【0973】 「運」『スバル』 第1年7號 昂發行所 1909(明治42)年7月1日 pp.129-135. 復刻されたもので読んだが、原文に忠実な邦訳である。

【復刻】：「スバル」複製刊行会 京都：臨川書店 1965(昭和40)年6月30日. 『明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》20：マーク・トウェイン集』 大空社 1996年10月26日 pp.314-320. 【原著】：Mark Twain, “Luck” (1886).

なお、『苦楽』第5巻6号(プラトン社, 1926年6月)掲載の「運」は別作品。

Ⅲ. 1909（明治42）年～1917（大正6）年 岡山第六高等学校（26～34歳）

石川林四郎は佐々木邦より4歳年長で、明治学院の先輩でありクリスチャンでもあったが²⁴、東京の第一高等学校から東大英文科を大学院まで了えて1907年から岡山の第六高等学校教授であった。その石川が1909年に嘉納治五郎校長の招請を承けて東京高等師範学校に転出することになった。石川が六高の後任に信者でもなかった後輩の佐々木を推薦してくれたのである。この時の採用に至る経緯について、杉本民三郎が次のように伝えている。²⁵

しかし履歴書を送ると、[六高の酒井佐保]校長は中等教員の免状もないようでは困るといい出した。それで石川さんから、何か実力を示すものはないかと言ってきた。そこで翻訳してあった『いたづら小僧日記』と、当時西園寺首相が知名の文士を招待したことがあり…朝日の社説となったので早速これを英訳して送ったら、それでよろしいということになった。

1909(明治42)年8月のこと、当時まだ全国で8校しかなかった旧制高等学校である岡山六高に26歳の佐々木は英語担当の専任講師として赴任、内地に戻ることができた。大抜擢であった。もちろん授業では「自分の選擇が許される限り小説を教科書にした」（書物と私）し、とりわけ「ユーモア小説も随分教へた」ので、授業とも併行させて「ユーモア文學に興味を持つて、續々翻譯を出版」（教壇から創作へ、p. 357）することができた。そのため、岡山に在

²⁴ 石川は、文部省訓令第12号が施行された1899年の直前に卒業したので中学卒業の資格を認められて、高等学校へ進学できた。

²⁵ 「佐々木邦先生の英語」『英語青年』第110巻12号（1964年12月1日）、p. 51（847）。渡部昇一（2015）にも、石川のことも含めて、この辺の事情が紹介されている。

任した8年間に彼が発表した作品は、僅かな創作短篇を除けば、すべてが翻訳であった。

さしあたりは M. V. F. Victor の活用であった。A *Bad Boy's Diary* (1880) の未訳部分から落ち穂を拾って『續悪戯小僧日記』【09X1】にまとめ、5月に単行本化されていた正編【0951】と、7月に刊行された『おてんば娘日記』【0972】とを併せて、“悪童物語”シリーズが揃い踏みになった。追いかけるようにして Victor の A *Good Boy's Diary* (1884) も『グッド・ボーイ日記』【10Z1】として訳出していたから、何匹目かのドジョウを狙ったことになる。

佐々木による Mark Twain の翻訳もいよいよこの頃からが本番であった。「運」【0973】に続いて「千萬元」【0991】が掲載され始めたところで、転任のどさくさからか中断していた。それが翌年の『各國滑稽小説』【1031】において訳了された。この短篇翻訳集では、巻頭の「千萬元」に続いて、ロシア、オランダ、スペイン、イタリア、フランス、アイルランド、ドイツの小品を集めて運動会の万国旗のような賑わいであった。佐々木は英語しか読めなかったので、何かの英訳された作品集を利用したのであろう。しかし日本では軽薄さの連想が伴う「滑稽」という書名が祟ったらしく、また玉石混交でもあったので第一編しか刊行されず、再版も再刊もなかった。結局、「千萬元」以外の翻訳はどこにも再録されなかったようである。

同じ頃に彼が奈倉次郎と2冊の Twain 作品集を教科書用に共編していたことを、勝浦吉雄（1988）が報告している。筆者（藤井）には入手できなかった文献なので、抄録の程度や注釈の精確さも含めて判っていない。ここでは氏の報告（pp. 25-29）を利用させて頂いて、収録作品名のみを並べておきたい。

1冊目は195頁の *Twelve Humorous Readings from Mark Twain* で、1911年に三省堂から刊行されて、“Luck”(1891), “About Barbers”(1871), “Aurelia's Unfortunate Young Man”(1864), “How I Edited an Agricultural Paper?” (1870), “The Killing of Julius Caesar ‘Localized’”(1864), “Edward Mill and

George Benton”(1880), “Eve’s Diary”(1905), “Is He Dead or Is He Alive?” (1893), “St. Joan of Arc”(1896), “The Esquimau Maiden’s Romance”(1893), “Travelling with a Reformer”(1893), “The £1,000,000 Bank Note”(1893) を収録する。

2冊目も翌年に三省堂から刊行された190頁の *Mark Twain for Young Folks* で、“The Prince and the Pauper”(1881), “The Story of the Bad Little Boy who did not come to grief”(1865), “The Story of the Good Little Boy who did not propose”(1870), “My Watch”(1870), “The Late Benjamin Franklin”(1870) を収めている由である。

この2冊に佐々木がどのように関与したかは不明であるが、収録の17作品に親しんでいたことは推測できる。ちょうど同じ頃に、Twainの出世作“The Notorious Jumping Frog of Calaveras County”(1865)を「賭け蛙」【1261】という題で訳して雑誌に発表した²⁶が、彼のTwain熱が一冊の本にまとめられたのは、岡山時代も終盤に近づいた頃の『ユーモア十篇』【1691】においてであった。既訳3篇のうち「運」が外され、別に8篇が新たに訳出された。²⁶ 木村毅が「トウエインの表面は朗らかな笑。その裏面には涙がかくれている隠微な作風は、英語を読みこなすのが困難な上、翻訳してその味を出すのは、よっぽどの老手たるを要する。」²⁷との指摘したのは1973年のことであったが、佐々木はこの短篇集の「著者小傳」で「マーク・トウエーンかわづの書いたものは悉くユーモア本位の文学である。しかし彼の諧謔の皮下には虚偽の世に対する熱烈な憤激がある。…元來一般社会よりは一段高い道德観を持つてゐて、世間を覺醒しようといふ願望を懐いてゐる偉大なユーモリストの一人であつた。」と、

²⁶ 勝浦(1979)は「V資料・文献目録」(pp.309-439)のなかで、1908~16年つまり岡山時代を中心に、佐々木が英語学習誌に執筆したであろうMark Twain関連の記事を4件報告している。

²⁷ 「大衆文学夜話(第二十二回)」『大衆文学大系22:佐々木邦・獅子文六集』(講談社、1973年2月20日)「月報22」, p.9.

Twain 文学特有の複雑さと作品の重層性に気付いていた。しかしそうした彼が腰を落ち着けて Twain の大作を訳出しようと取り組んだのは、更に 3 年先になってからであった。すなわち、慶應義塾大学の予科教授に就任したことで、職場に気兼ねせずに翻訳を出版できるようになってからのことであった。

そもそも誇れるほどの学歴も無い佐々木が官立学校に採用されたについては、裏の事情もあつたらしく、本人が「教壇から創作へ」で明かしているところでは、「私は大學を出てゐないから、俸給が二三割安くて済む。…校長は思ふところあつて語學を私學で堅める方針を取つた。」(pp. 356-357) せいであつたらしい。しかし、彼を採用した酒井佐保校長は翌 1910 年に三高の校長に栄転してしまい、後任の金子銓太郎は、官職にありながら内職に専念する佐々木を目の敵にしたらしい。それで「七年間俸給据置といふ前代未聞の冷遇を受け」(煙草の思ひ出)、「五年間講師を勤めた後、再三催促して[1914 年 8 月]漸く教授にして貰つた。それから三年ゐたから、都合八年である。八年目にして初めて俸給が昇つた」(教壇から創作へ, p. 357) と、飼ひ殺しにされた恨み節を後年まで繰り返していた。²⁸

小説「凡人傳」といえば、彼が慶應も辞めて専業の作家に転業して間もない時期の作品であるが²⁹、そのなかでは岡山六高から慶應に転出する 34 歳 (1917) までの彼がモデルにされている。主人公の河原友一は、明治学園メシガクエンを卒業してから検定で英語教員の資格を取り、九州の中学校から始めて、10 人まで殖える子供に食べさせるために転任を繰り返し、「いや、東京の私立学校へ行行って稼ぐんだ…あつち彼方は時間給だから、稼げば稼ぐ丈け余計取れる」(p. 341) との思いから東京を目指すことになる。佐々木自身も岡山の地にあって、家族を養うために翻訳を量産し続けざるを得なかった状況が、この時期に出版された翻

²⁸ 例えば、「この校長は私がこの世で会った中の一番厭な男として記憶に残っている」と、佐々木は「M.C.C.」のなかで呟いている。

²⁹ 1928 年 9 月～1929 年 11 月に『富士』に連載された。第二次全集の『第四巻』から引用する。

訳書がユーモア物ばかりでなかったことから窺われよう。それらの多様な翻訳書が佐々木流の文学を熟成させるのに貢献したか否かの評価については、今後分析されることを期待したい。

六高という現実の職場では、佐々木独りが冷遇の標的にされたようでもなかった。彼は随筆「僚友秘話」で岡山での同僚たちを懐かしく思い起こしながら、「私達のグループ五、六名は私を筆頭に[金子]校長から嫌われた。…私達は皆俸給の上がない組だった。」と洩らしている。更に「M.C.C.」では、金子校長は学生から授業振りを聴いて教員の勤務評定をして処遇に反映させていたとも糾弾している。しかし後年になって、岡山時代に「半殺し」にされていたグループから何人かを佐々木が慶應に呼んでやったところ、「やっぱり校長の判定は略々あたっていると思った」くらいであるから、佐々木が冷遇された原因はひょっとしたら彼の授業振りとも関係していたかもしれない。

その授業振りを教え子たちが回想している。銀行家の守分^{ひさし}十は、六高での「佐々木邦先生は、稀にみるユーモアに富んだお方であられ、独特の教授法で、非常に判り易く、知らず知らずのうちに面白く英語が覚えられ、生徒間でも好評を博されており、皆から慕われて大変人気がありました。」³⁰と語っているが、これは圧倒的に少数派の意見であって、これほどの称讃を他所に見出せない。

盛んにユーモア物を翻訳して紹介してきた教師だからといって、それが性格や授業までが陽気であるという保証にはならない、というのが佐々木の永年の持論であったが、彼もその例外ではなく無愛想な教師であった。試験範囲が広がらないように学生は教授を脱線させようと誘導するが、「私は返辞もしないで講義にかかる。…私は口重だから、時に学生を喜ばしてやりたくても、芸当の持ち合せがない。」(不当の期待)といった調子で、教科書を覗き込みながら淡々と授業を進めていく。しかも滑舌が悪かったから講義は聞き取り難くかつ

³⁰ 「佐々木邦先生のこと」 第二次全集『補卷三』「月報13」, p. 3.

たらしい。教員室でも冗談的にされたくらいで、自らが「趣味の遺傳」で述懐しているところでは、英国人教師が「佐々木君は英語の教師でゐながら、あの人の英語は半分ぐらゐしか分かりません」と評せば、同僚たちも「いや、あの人は日本語で話しても半分以上は分らないんです」と調子を合わせていたそうである。

10年ほど後になって、明治学院高等学部で Jerome K. Jerome (1859-1927) のユーモア小説 *Three Men in a Boat* (1889)³¹ を教わったことがあり、後に佐々木担当の編集者となった上田健次郎は、佐々木の授業を受けた時の印象を次のように回想している。個人の教授法というのは簡単に変わるものではないから、釜山以来の彼の授業振りを想像する手掛かりにできるであろう。

授業は至って平凡、というより、むしろ少々陰気くさく、およそユーモア作家として期待していたような明るさ、軽妙さは望むべくもなかったからである。終始うつむき加減に、抑揚の乏しい調子で、淡々として訳読をつづけて行く先生の授業ぶりに、何か物足らなさを覚えたのは、これまた私だけではなかったろう。³²

そうした授業をしていたとすれば、金子校長による勤務評価にあつて「私は甲の下か乙の上ぐらいだったろう」(M.C.C.) という佐々木の自己採点は、今日の「授業評価アンケート」に掛けられでもしたら、認識が甘いと反省を迫ら

³¹ 佐々木は「のらくら三人男」と題して訳す積もりでいた。いっぽう『のらくら三人男』(内外出版協會, 1911)の訳者浦瀬白雨は、「序言」で「六高の佐々木君には出版に就いて非常の尽力を載いた」と謝している。具体的事情について浦瀬は、日本英文學會(編)『英文學研究』第十一卷第二(1931年4月20日)所載の「故 Jerome 氏及び其他の人々」で、「私の希望を聞いた邦さん、潔よく、そんなことなら *Three Men in a Boat* の翻譯は浦瀬に譲らう。そして事實を出版協會に打ちあけて自分の、代りに私を出すやうに計らつてやらうといふ、誠に氣持ちのよい、さつぱりした態度だつた。」(p. 304)と記している。

³² 上田健次郎「不肖の弟子」第二次全集『第三卷』「月報3」, p. 4.

れるであろう。岡山高等学校での、校長 vs 佐々木教授 vs 学生という居心地悪い関係は幾分トラウマとなって残ったようで、「地方で十年間教師をしてゐた時代が身に沁みてゐる證據に、今でも地方へ赴任する夢を最も頻繁に見る。…今度はイヨイヨ本当になつてしまつたと思つて苦しむ。」(夢を樂む)と呟かせたりもしたが、そうした居心地の悪さと無縁ではなかつた筆者(藤井)も、例えば授業回数が15回に足りていないと責め立てられたり、「必ず…」とか「締切厳守」とか「至急…」といった文言に追い回される悪夢に引退してから後も悩まされることであろう。

しかし筆者とは違って佐々木には、石川林四郎をして「日本一だ」³³と言わしめた英語の実力があつたから、岡山に燻って一生を終える積もりはなかつたはずである。当時は教師にとって幸せな時代で、教育効果というものは教授法よりも以前に教授者の学識と学生の向学心とから自ずと産み出されるものであるという麗しい信頼の念が相互の間に成り立っていたから、より優秀な学生の集まる東京へ脱出できれば、佐々木教授には教壇に立ち続けていける見込みは十分にあつた。岡山での冷遇に辟易させられた彼は、自らの英語力をアピールするための“業績”として、翻訳経験や教壇での蓄積からまとめた『英語の基礎』(丁未出版社)を1917年2月5日に出版していた。それは、人体～生活～心の領域を主題にした例文を大量に暗記させて読解力と表現力を鍛えようとする、彼が教室で採っていたであろう教授法的一端を想像させる英語学習書であつた。その“業績”がどう効果を奏したか判らないが、幸いにも慶應義塾大学予科への転出が実現することになった。そして読者にとっても幸いなことに、この人事が佐々木に対して将来の国民的ユーモア作家誕生への進路を用意することになったのである。

³³ 杉本民三郎「佐々木邦先生の英語」『英語青年』第110巻12号(1964年12月1日), p. 51 (847).

《翻訳・翻案作品》

【0991】 佐々木邦 「千萬圓（マーク・トウエーン）」『文庫』 少年園
第1回：第40巻1號 1909(明治42)年9月15日 pp.1-10 / 第2回：第2號
10月25日 pp.1-2 / 第3回：第3號 11月25日 pp.1-4. 下記の復刻版
で記述した。

【原著】：Mark Twain, “The £1,000,000 Bank-Note”(1893).

原文（1893）で36頁あるうち1～22頁分が邦訳されたところで途切れた。版元の事情か、岡山から上京する慌ただしきで佐々木が入稿できなかったかであろう。全訳は【1031】で実現したが、読みやすい日本語で忠実に訳されている。

【復刻】：『明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》20：マーク・トウエーン集』 大空社 1996年10月26日 pp.321-336.

【09X1】 佐々木邦（譯述）『續悪戯小僧日記』 内外出版協會 1909(明治42)年10月25日 《18.5×12.5 ㌘ / 102頁 / ¥0.³⁰》. 書名は題扉に拠った。「はしがき」に「是は『いたづら小僧日記』に譯し残した所から主に材料を取ったものである。…いたづら小僧とおてんば娘の日記が完成した。」とある。400字詰め原稿用紙で約100枚の規模に邦訳されている。

【原著】：Metta Victoria Fuller Victor, *A Bad Boy's Diary* (1880) を全訳すれば400枚ほどになるだろうが、正篇【0951】とこの続篇【09X1】を併せても300枚弱にしかならない。

西^{にしごき}寄康雄は、続篇の主人公である太郎が本篇に比べて観察眼を働かせるようになって内省的傾向を強めてきており、むしろ『おてんば娘日記』【0972】の亀子に近い性格を示していることに、「佐々木邦の執筆姿勢への微妙な変化」を感じ取り、【再録】として下に記述した3作品の合巻版が出版された1917年をもって「それまでの佐々木邦の文学的業績にひとつの区切りを付け、邦の著述活動が新たな段階へと入っていく」(p.68)と指摘している。

【再録】：『(縮刷合巻) いたづら小僧日記 おてんば娘日記』 弘學館 1917 (大正6)年6月15日 pp.186-282. 第二次全集『第一巻』(1974). 『いたづら小僧日記 おてんば娘日記』 新学社 1975年4月1日 pp.150-220.

【1031】 佐々木邦 (譯) 『各国滑稽小説 第一編』 内外出版協會 1910(明治43)年3月18日 《19×12.5 ㌘/ 227 頁/ ¥0.⁵⁰》. 佐々木は英語以外は読めなかったから、二～六は何かの英訳された選集から邦訳したのであろう.

一「千萬圓」(亞米利加, マーク・トウエーン) pp.1-59. 【初出:0991】
初出では3分の2が訳されたまま中断していたが,本書で完訳された.

【再録】:「百萬磅紙幣」と改題して【2831, 3281】

二「錢」(露西亞, ステップニアク) pp.61-94. Sergius Stepniak (1851-95) は,ロシア方言を用いた作品を多く遺した小説家の筆名であった.

三「小共和國」(和蘭, ハルレルブリンク) pp.95-156. Hellenbrink? 未詳.

四「領収控帳」(西班牙, アラルコン) pp.157-168. Pedro Antonio de Alarcón (1833-91) は,『三角帽子』(*El Sombrero de Tres Picos*, 1874) のような教訓的物語に長けたスペインの作家.

五「變物」(以太利, アミーチス) pp.169-180. Edmondo De Amicis (1846-1908) は *Cuore* (1886) が博く読まれたイタリアの作家.

六「ジル・ブラス物語」(佛蘭西, レ・サージ) pp.181-202. フランスの作家 Alain-René Le Sage (1668-1747) が,傾倒するスペインのピカレスク小説³⁴に範を採った *Histoire de Gil Blas de Santillane* (1715-35) は最重要のピカレスク小説. 原典から完訳した杉捷夫訳

³⁴ 小林信彦が『小説世界のロビンソン』(新潮社, 1989年3月20日)の第十四章(pp.125-132)で“picaresque novels”を巧く解説している. ちなみに筆者(藤井)のイメー
ジでは,諷刺が隠し味になった各話を各種味の団子に見立てて,ピカロ(チクリと当て
擦る主人公)という串が複数の団子を貫いた構造になっている. つまり団子どうしは分
離しているので,好み次第で味の取り合わせ(抄訳)ができる.

（岩波文庫，1953～54）で照合したら，第 2 篇 3 章，第 1 篇 3 章，第 7 篇 2～4 章から抄訳されていた。【22Z1】と原作が同じであるが，訳文も規模も全く異なる。

七「忠義者」（愛蘭，ラバー） pp.203-214. Samuel Lover (1797-1868) はアイルランドの芸術家で *Handy Andy* (1842) といった小説も書いていた。

八「求婚」（獨逸，フオルクマン） pp.215-227. Volksmann? 未詳。

【1041】 佐々木邦（譯述）『當世^{りょうじん}良人氣質』内外出版協會 1910(明治 43) 年 4 月 15 日 《20×12 ㌘/ 205 頁/ ¥0.⁴⁰》。

【原著】：*That Husband of Mine* (1877)。なお作者の Mary Andrews Denison (1826-1911) は牧師を夫に持ち，M. V. F. Victor 同様に米国の通俗作家（dime novelist）のひとりで，約 80 作品を残したらしい。

原著者についてと邦訳方針について，佐々木は「はしがき」で次のように記している。

其の筆致と出版會社の同一なのから推して，譯者は此の無名氏を例の『いたづら小僧日記』の著者と同一の無名氏だと思ふ。譯は読み好いやうに可成日本的にした。随って省かねばならぬ所もあつたが，附加へた所は極少い。

物語は，新聞記者清野清（原作では Charlie G. Harman）を夫に持った綾子（Elsa）が新婚家庭事情を語る体のもの。清の親友の文学者日高十雨（Jack Inglehart）への愛情と郷里の銀行家奥平（St. Olave）との婚約に板挟みになって煩悶する妹妙子（Lina）を綾子が論そうとする中盤の場面は，全作が章（原文では 24 章）で区切られていないだけに途切れなく緊迫感を盛り上げて，本書が翻訳作品であることを忘れさせる。と同時に，Charlie が妻のお門違いの格

気を冷やかして “O my sweet little Elsa! It would take more than a fire-engine, if she is a beauty, to drive me away from you.” (ch. 4, p. 44) と笑わせる下りを、「綾、いくらお前が色が黒いたって、僕は眞逆蒸氣機關にお前を見替へる料簡はないよ」(p. 31) と清に言わせるような筆遣いが訳文に散見されて、読者は佐々木のユーモアに引き込まれてしまう。

【再録】：『當世細君氣質』【1061】と、「性質から言つても、丁度續き物の上巻下巻と云うつた様のようなものだから、爾うすれば^{はんどく}繙讀上一層興味が加はる」として、1913(大正2)年3月15日になって『新世帯物語』と改題した合冊本が内外出版協會から再刊され、その後半に同じ頁付のままで収録された。

【1061】 佐々木邦 (譯述) 『當世細君氣質』 内外出版協會 1910(明治43)年6月20日 《19×12.5 ㌘/ 195頁/ ㊦0.⁴⁰》。

【原著】：Mary Andrews Denison, *That Wife of Mine* (1877)。清の回想が綾子との馴れ初めで始められる辺りは読ませるが、どこまでも盛り上がり欠ける漫談調で、本篇が読ませてくれていただけに期待外れの続篇。

【再録】：『新世帯物語』 内外出版協會 1913(大正2)年3月15日 《18×12 ㌘/ 195+206頁/ ㊦0.⁸⁰》。但しこの続篇を前半に収録したことで、妙子が日高を選ぶかどうかを山場とする本篇【1041】での効果が著しく損なわれている。

【10Z1】 佐々木邦 (譯) 『グッド・ボーイ日記』 内外出版協會 1910(明治43)年12月17日 《19×12 ㌘/ 181頁/ ㊦0.⁴⁰》。

【原著】：Metta Victoria Fuller Victor, *A Good Boy's Diary* (1884)。

佐々木による「はしがき」には次のようにある (全文)。

是は『いたづら小僧日記』の著者の著 *A Good Boy's Diary* から面白さうな

ところだけを撰り抜いて譯補したものである。主人公はグッド・ボーイだけれど自分免許のグッド・ボーイだから、此の日記の内容は『いたづら小僧日記』と少しも選ぶ所がない。要するに Another Bad Boy's Diary と銘を打っても差し支えない書物である。

従来通りの我流綴りの日記体で、約 250 枚規模の原文から 180 枚ほどに抄訳されている。主人公五百騎頭太郎（原文では John）が aim（人生の目的）の意味を取り違えて猫を撲ち殺そうとする段では、「さて、目的といふのは何の事だらうと思って、先生に訊いて見ると、目は眼なり、的^{まなこ}は的^{まと}なり、目的とは即ち見當をつけて狙ふべき的^{まと}の義なりと教へて下すった。」(p.2) と、かなりの「譯補」振りである。続いて、水難救助で褒められようとした太郎が妹の「菊ちゃん」(Daisy) を風呂桶に沈める場面もあったりで、どうも本作ではあざとさのほうがユーモアに勝っているようである。

【11Y1】 シャルル・ワグネ（原著）/ 佐々木邦（譯述）『新譯簡易生活』内外出版協會 1911(明治 44)年 11 月 2 日 《19×13 ㌘/ 232 頁/ ¥0.50》。

【原著】：Paris の Luther 派牧師 Charles Wagner (1852-1918) によるフランス語の説教集を Mary Louise Hendee が英訳した *The Simple life* (1901)。

蝨^{しゅう}湖（山縣五十雄）に「近時歐米の讀者社會を震動せる名著」（小序）と勧められて、布施知足^{ちそく}が「分りやすきを主として必らずしも原文には拘泥」（緒言）しない文語訳を 1906(明治 39)年 2 月に東西社から出していた、その頃の佐々木は就職浪人ちゅうで代訳に勤しんでいた。佐々木訳は口語訳になっており、内容的には明治学院筋から依頼されての訳出とも想像されるが、両訳間の繋がりも含めて一切が不明である。

【1261】「賭^{かはづ}け蛙」『文藝俱樂部』第 18 卷 8 號 博文館 1912(明治 45)年 6

月 pp. 67-77. 【原著】：Mark Twain, “The Notorious Jumping Frog of Calaveras County”(1865).

Twain のこの出世作を、佐々木は登場人物名を簡素にただけで、原文に忠実に邦訳している。彼の翻訳した短篇小説の多くが Twain によるものであったが、様式上の制約もあってか、短篇の翻訳では佐々木が訳文に遊ぶ余地はあまり無かったようである。ここでも僅かに刈り込んだだけで、数字の移植には些か無頓着でありながらも、メリハリのある日本語に移されている。

【復刻】：『明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》20：マーク・トウェイン集』大空社 1996年10月26日 pp. 339-349. 【再録：1691】 【再録】：「跳ね蛙」と改題して【2931】

【12Z1】 佐々木邦（譯）『^{ひとりもの}獨身者の獨思案』内外出版協會 1912(大正元)年12月 《19×13 罫/ 344頁/ ¥1.⁰⁰》. 【原著】：Donald Grant Mitchell (筆名 Ik Marvel), *Reveries of a Bachelor, or a Book of the Heart* (1850).

原著者は Yale 大学で法律を学び、文学に惹かれて十数篇の著述を Ik Marvel の筆名で残したが、今日では本書と『夢想生活』とが知られている。「原序」によると、「結婚生活の有らゆる方面にかけては獨身者が…唯一の安全且つ精確なる観察者である」から、「世の獨身者の頭脳に浮んで来る…、同時に用心深い彼等にあつては容易に世間に發表し兼ねる空想」を本書に「何等飾る所も匿す事も無く、其の通りに書いた」由である。知的男性の夢とも思い出ともつかない子供時代から結婚後の追想は、佐々木の代表作「心の歴史」（初出 1947～49）で用いられた視点を先取りしているようでもある。しかしネイチャー・ライティング式の描写は佐々木の本領とするところではないし、この【12Z1】はユーモアで読者を愉しませてもくれない。にもかかわらず、【1351】においても同じ作者の同じ傾向の作品が再度選ばれている。彼が就職浪人中に代訳した作品との関わりとか、六高で教材にしていたとか、何らかの因縁があって訳出

を思い立ったのであろうが、不明である。

邦訳そのものは原文に沿っているが、適宜枝葉を刈り込みながら進められており、原著の“A Roman Girl”(pp.184-193)と“The Apennines”(pp.194-201)では省略が顕著なため、「ローマ娘」(pp.223-236 & 236-237)に一体化されている。

【1351】 佐々木邦（譯）『夢想生活』 内外出版協會 1913(大正2)年5月15日 《19×13 ㊦/ 344 頁/ ㊦1.⁰⁰》。【原著】: Donald Grant Mitchell (筆名 Ik Marvel), *Dream Life, a Fable of the Seasons* (1851)。

【12Z1】 と同断の思索的なネイチャー・ライティングで、微睡みのなかで人生の春夏秋冬が自伝風に語られる。底本にされた原著は1883年版で、巻頭に「ワシントン・アービングの思ひ出」(pp.1-11)と「初版後三十二年目に」(pp.13-16)が併せて訳出されている。訳し振りについても、部分的な刈り込みが無いとはいえないが、総じて原文に忠実な邦訳である。

【1391】 佐々木邦（譯）『ピックウィック俱樂部物語』 内外出版協會 1913(大正2)年9月15日 《19.5×13.5 ㊦/390 頁/㊦1.⁰⁰》。【原著】: Charles Dickens, *Posthumous Papers of the Pickwick Club* (1836-37)。

本書の「はしがき」が「骨子となる物語だけを譯出した」と断っているように、原作の全57章ちゅう、Pickwick氏が婚約不履行で訴えられて裁判に敗訴する第34章までを、挿話は飛ばす駆け足で筋を追った抄訳。佐々木は専ら散文を翻訳してきたが、長篇小説では原文に忠実であらねばならないとの拘りは持っておらず、読者が受け入れ易いように自由気儘に意識して彼流の訳文を編み出す傾向にあった。このピカレスクの長篇からの抄訳もその例外ではない。

その後、第一次全集「月報第三號」所載の「英國のユーモリスト」(pp.1-2)において、彼は本作について、「疾うに日本語に移植されるべき筈のものだ

が、恐らく譯者があるまい。餘程英語の力がある上にヂツケンズに近い人でないとあの長篇に盛れてゐるユーモアの全幅が分らない。」と述べて、訳了する可能性をほのめかしていた。【参考：18Y1】

【13Z1】 ジャネー・ハーヴェー・ケルマン（原著）／佐々木邦（譯）『少年少女基督伝』内外出版協會 1913(大正2)年12月14日《15×11 ㌘/ 286頁/ ¥0.⁵⁰》。

【原著】：Janet Harvey Kelman, *Stories from the Life of Christ* (1905).

「三十三年間の出来事——我等の主、イエスキリストの生涯、逝去、復活の物語」(序)が、子供に語り掛けるように、しかし格調を保ちつつ日本語化されているが、むしろ宣教文書であって、ユーモア物ではないから、佐々木らしきで愉しませてはくれない。半世紀後のことであるが、彼自身は「学生のころはキリスト教に接近してましたが、今は疑問をもっています。というより、はっきりいえば否定的ですね。」(鳥越信, p. 184)と語ったこともあるから、明治学院関係者かキリスト教信者であった次第の二郎かその下の順三から依頼されての訳出かもしれない。

【1441】『全譯ドン・キホーテ』東亜堂書房 1914(大正3)年4月12日《22.5×15.5 ㌘/ 8+4+432頁/ ¥1.⁵⁰》。

【原著】：Miguel de Cervantes, *Don Quixote* (前篇：1605, 後篇：1615).

佐々木はスペイン語を解さなかったので、英訳本からの重訳である。既訳【0971】の150枚から本書では全30回900枚強に増補されたので“全譯”なのであろうが、原典からの完訳である牛島信明訳(岩波文庫, 2001)の約3,200枚には及ばないので、どこかの英語抄訳本を“全訳”したとも考えられる。「舊師皆川正禱^{まさき}」への深謝で締め括られている本書の「はしがき」(pp. 1-8)に拠ると、底本は Jones の *The Adventures of Don Quixote de la Mancha* であった

らしいが、当時定評のあった John Ormsby 版英訳（1885）を誤記しているかもしれない。また Thomas Shelton 著 *The History of the Various & Witty Knight-Errant Don Quixote de la Mancha*（1895）も参照した由である。

その「はしがき」が原作者を「今日の日本に於て滑稽忠臣蔵とでも言ふものを書き、流行の義士物語に痛棒を吃はせる者」と喩えているように、主人公は「某の目の前にてロジナンテに狼藉を加へたる上からは思ひ様仇を討つて遣す。其方も此度は加勢致して苦うないぞ。」（第五回）と大時代な侍言葉を一貫して語り、地の文は「成程主従は先刻から寝そべつた儘で問答をしてみたのであつた。」（同）式の口語体に訳されている。しかも佐々木の訳文も軽快で、「二一天作の五か何かを口の中で唱へて」（第一回）、「此奴は恐れ入谷の鬼子母神だ！」（第三回）、「いやどうも是は驚き桃の木山椒の木」（第八回）、「若い方とチン々々鳴のチン鴨でゐますぞ！ 爲る事爲す事皆鶉の嘴でゐます。」（第十回）等のひょうきんな言い回しが次々と筆を衝いて、まるで講談本でも読んでいるかような気にさせられてしまう。

【再刊】：『全譯ドン・キホーテ（縮版）』大阪：大文館書店 1927(昭和2)年2月5日 《函18×11 ㇿ/ 764頁/ ¥2.³⁰》。同一内容の小型本。

【1691】マーク、トウエーン（作）/ 佐々木邦（譯）『ユーモア十篇』丁未出版社 1916(大正5)年9月5日 《19×13 ㇿ/ 288頁/ ¥0.⁸⁰》。本書「はしがき」に、「苦闘を日常の生活とする我等の間には、讀むで微笑を禁じ得ないやうなユーモア本位の小説は、確かに立派な存在の理由を有する。…ユーモアの何たるかを傳へ得れば、甚だ幸ひである。」と誌されている。

「負けない男」 pp.1-46. 【原著】：“Travelling with a Reformer”(1893).

忠実な邦訳. 【再録】：“社會改良家」と改題して【2931】

「賭け蛙」 pp.47-64. 【原著】：“The Notorious Jumping Frog of Calaveras County”(1865). 【初出：1261】

「エスキモー乙女物語」 pp. 65-110. 【原著】：“The Esquimau Maiden’s Romance”(1893). 語り起こしの部分が簡素化されて、Twain が聞き手であった設定が判らなくなった。途中で僅かに省略したり数字の変更も見られるが、それ以外は原文通り。【再録】：「ミス・エスキモーのロマンス」と改題して【3281】

「骸骨」 pp. 111-130. 【原著】：“Nicodemus Dodge and the Skeleton.” 勝浦 (1980, pp. 154-161) が教えるように、*A Tramp Abroad* (1880) の第 23 章に取材した翻案であるとするならば、佐々木は固有名詞を日本語化したうえに肉付けを施して、落語を思わせる作品に改作したことになる。

「天才畫家」 pp. 131-162. 【原著】：“Is He Living or Is He Dead?” (1893). 忠実にして快調な語り口に邦訳されている。【再録】：「死んで生きてゐる話」と改題して【2931】

「逸話文學」 pp. 163-182. 【原著】：“About Magnanimous-Incident Literature”(1878). 原文に忠実な訳。

「象泥棒」 pp. 183-240. 【原著】：“The Stolen White Elephant”(1882). 中篇的規模でありながら、原文から逸れることなく忠実に訳出されている。佐々木は、極限的なナンセンスを振りまわす Twain のペースに乗せられたまま、我知らずのうちに訳了してしまったのであろうか。

「貴族病者」 pp. 241-256. 【原著】：“Rogers”(1874). 原文に忠実な訳。【再録：3281】

「善人と悪人」 pp. 257-272. 【原著】：“Edward Mills and George Benton : A Tale” (1880). 原文に忠実な訳。

「農業新聞記者」 pp. 273-288. 【原著】：“How I Edited an Agricultural Paper” (1870). 原文に忠実な訳。

【再刊】：佐々木邦 (訳) 『マーク・トウェーン名作選：貴族病患者』 東西

出版社 1946(昭和21)年10月15日 《18.5×13 ㌢ / 212頁 / ¥15.⁰⁰》。再刊に際しては、「負けない男」のみを「社會改良家」と改題したうえで、全10篇を再録する。

【1741】 J. M. Barrie（著）/ 佐々木邦（譯註）「My First Cigar：初めての葉巻」『英語青年』 英語青年社 第一回：第37巻1號 1917(大正6)年4月1日 p.23 / 第二回：第2號 4月15日 pp.49-50 / 第三回：第3號 5月1日 pp.82-83.

喫煙論集 *My Lady Nicotine* (1890) から Chapter II の全文をそのまま対訳し施注した連載。『英語青年』では意識をすると読者から質問が殺到し兼ねないので、ここでの佐々木は構文に沿って行儀良く説明的で読みやすい訳文を心掛けています。もっとも原文も難解ではないので、注釈されるべき箇所は多くない。なお、第一次全集「月報第六號」の「私と煙草」で、佐々木は英文学が大発展したのは Walter Raleigh が煙草を英国にもたらせたお陰であったとの説を開陳している。どちらの記事にしてもいかにも愛煙家によるものらしい。

IV. 1917（大正6）年～1928（昭和3）年 慶應義塾大学予科教授（34～44歳）

岡山の第六高等学校に教えるようになって8年目にやっと佐々木の俸給が昇がった。半生を回顧した「教壇から創作へ」が伝えるところでは、それまでも「東京へ歸る運動を怠らなかつた」(p.358)らしいから、彼の実力を買って来た東京高等師範学校の石川林四郎に再び頼って高師に呼んでもらおうと考えたかもしれない。その教授なら大学を出ていない佐々木も有資格者であろう。それに官立から官立への転任なら恩給受給資格を保持できる。何年かの運動の

すえ「竟に先輩の親切な盡力で慶應義塾に入れて貰ふことに定つた。豫科の教師だ。昔の先生が主任をしてゐた」(p.358) のが幸いしたらしい。小坂井澄に拠ると、慶應義塾大学に打診したところ、当時の予科長が同郷の先輩にあたる田中萃一郎であったことから、喜んで彼を迎えたいとの回答があったらしい(pp.104-105)。確かに田中は、邦の生まれ故郷であった伊豆の中学校で校長を勤めたこともあったが、田中との間には何かもっと強力な接点があったのではなからうか。

早速慶應のある幹事が、偶々六高の金子校長と親しかったとかで、佐々木を申し受けたい旨を伝えたところ、意外にも校長は貴重な人材であるから手放せないと断ってしまった。その報せを慶應から受けて慌てた佐々木は、校長と直談判に及び、後任補充を案ずる校長に弟の順三を推薦したら難なく解放して貰えた。なにしろ順三は東京帝国大学を主席で卒業していたので、面接も省略して採用が決まった由である。しかし、校長のこうした妨害が図らずも慶應のなかでの佐々木の株を上げることになって、岡山では乙組(下積み)に入れられていた彼であったが、「慶應では私は甲組に入つてゐた。順調そのもので毎日愉快に勤めることが出来た。」(教壇から創作へ、p.360)らしい。1917(大正6)年の年度が終わる8月を待って佐々木は六高教授を退官し、慶應義塾大学の予科に転出した。この時は「天にも昇るように嬉しかった」と彼は『人生エンマ帳』(1963)の「まえがき」で回顧している。34歳にして慶應の教授であった。私立大学であったから、翻訳の出版も大いに奨励されたそうである。以後慶應には1928(昭和3)年3月までの10年半という、佐々木にしては永い年月にわたって奉職することになる。

社会的なステータスは上がったが、教室での佐々木は相変わらずであった。「地味な、厳格な、ぶすっとした教師」振りで、「小さな声でもそもそとしゃべるので、一番前列の席にいても、ほとんど聞きとれない」とか、「全く先生の講義はつまらなかった」とまで言われ、「これでよくも大学の先生が勤まっ

たものだ」と悪評さくさくであった。それでも授業は成り立っていて、大学当局からも一目置かれたというから³⁵、優秀な学生と寛容な職場に恵まれた佐々木教授は恵まれていたと、同類である筆者は羨望の思いを禁じ得ない。こうした学生サイドの回想談は、佐々木の死後になって刊行された第二次全集の月報に見出せるのであるが、作家経歴の後半になって教壇に見切りを付け創作に専念した見識があったからこそ発揮された彼の文才を賛美しようとのレトリックも多少は意図されての回想であったろう。

佐々木教授のサイドにも言い分はあった。「私は口重だから、時に學生を喜ばしてやりたくても、藝當の持ち合せがない。」（不當の期待）とか、そもそも「教師には元來學究的で辯を好まないものが多い。テキストを使つて講義をするから無口でも勤まる。」（テーブル・スピーチ）とは、開き直りにも聞こえるが、能ある鷹であればこそ許される言い分であった。だいたい後の1940年頃になって、彼は鹿島孝二に向かって「私は、クラムジーという言葉が好きです」と語ったり、「私などはさし当り、クラムジー・イン・スピーキング、話下手です、というところでしょう」とか、「ウィットは器用さから生れるおかしきで、ユーモアはクラムジーから生れるおかしきでしょう」と繰り返したらしいが、自分から好き好んで *clumsiness* を表看板にしていたはずはない。³⁶ しかしこうした負い目を自覚できたからこそ、彼はユーモア文学の効用に期待し、それにのめり込めたに違いないと、教授法において同様に *clumsy* な筆者には何やら思い当たるのである。

着任して半年後、英語学習書『英語の精髓』^{ていび}（丁未出版社、1918年3月5日）が刊行された。主題を自然界の領域に拾って例文と邦訳をセットにして並べた、

³⁵ それぞれの出典は、藤浦沈「三田の佐々木邦先生」第二次全集『第五卷』「月報5」, p.1. 鹿島孝二「教え型：佐々木邦先生の思い出(3)」同『第三卷』「月報3」, p.7. 宮崎博史「師弟通信」同『補卷二』「月報12」, p.2. 細島喜美「「まじめ人間」賛」同『第六卷』「月報6」, p.3.

³⁶ 鹿島孝二「Clumsy in Speaking」第二次全集『補卷四』「月報14」, p.8.

『英語の基礎』に続く姉妹篇であった。予科教授であるために求められた“業績”のうちだったのであろう。しかし彼が本領を發揮できる方面の教材は、やはりユーモア文学であったと考えたい。³⁷ 彼の書齋はその方面の文献でギッシリだったそうである。³⁸ 追いかけるようにして1918年3月には、「主婦采配記」【1831】と題したユーモア物を雑誌に連載し始めた。原作はG. R. Simsの *Memoirs of a Mother-in-Law* (1892) であった。Londonの老舗商店主の雷夫人が、万事に頼りない夫に代わって、4人の娘婿と3人の嫁を相手に奮闘した手記という佐々木好みの設定である。それは価値観を異にする親～娘～息子～婿～嫁間の衝突を滑稽に捉えて読者を飽きさせない。Twain流の構えた諷刺とはむしろ無縁な、将来の佐々木文学の基調を予感させる好著であった。固有名詞や数字も含めて逐語訳に近いが、原著の全18章を全訳すれば500枚にはなるだろうが、邦訳では全10章で約360枚しかないところから、例によって面白いところ取りの抄訳であった。

「主婦采配記」の連載が終わり、『諷刺諧謔 姑め采配記』【1921】として単行本化された頃、佐々木は同僚の「戸川[秋骨]さんと一緒に母校明治學院[高等学部]へ一週二三時間手傳ひに行つてゐたことがあつた」(先輩の死)らしいから、そこでの授業振りも参観しておこう。1920年に十和田操は30人足らずの教室で佐々木からEdgar Allan Poeの *The Gold-Bug* (1843) の訳読を習っており、「マーク・トウェーンはまだまだだれにも触れさせられない箱入り娘やドル箱みたいだったのであろう」と惜しんでいる。³⁹ あるいは、石川林四郎の勧めで明治学院に入学し、後に明治学院大学教授になった斎藤國治は、1925年にGeorge Eliotの *Silas Marner* (1861) を講じた佐々木の「英語の発音は

³⁷ ユーモア文学一辺倒でもなく、時には「ハマーソンといふ人の「知的生活」といふ本を英語の教科書に使つたことがある」(素人藝雑感)らしい。P. G. Hamertonの *The Intellectual Life* (1873) の教科書版が1920年代に数社から出ていた。

³⁸ 匿名記者「佐々木邦先生(三)」第一次全集『第八卷』「月報第八號」, pp. 3-5.

³⁹ 『英語青年』(1964)の「追悼：佐々木邦氏を偲ぶ」(p. 50 (846)). また、「珍太郎先生の授業」第二次全集『第五卷』「月報5」, p. 3.

素晴らしかった。しかし、日本語は咳ばらいで補って」いたと回想している。⁴⁰ どちらもユーモア文学とは無縁の作品であったが、（第 III 章にも触れた通り）上田健次郎は明治学院で Jerome K. Jerome の天真爛漫な *Three Men in a Boat* (1889) を陰気臭いが滋味もある佐々木先生から教わっていた。しかし何を講じたにせよ、点が辛い佐々木は学生から敬遠されがちであった。稀に質問してくる学生がいても、説明が懇切に過ぎて相手をゲンナリさせたいから、学習意欲のある学生なら大切にすが、怠け者からは距離を置くようにしていたのではなからうか。筆者にもそうした傾向があるので思い当たるが、むしろ佐々木の方で学生から敬遠される状況を意図的に拵えていたと想像する。

明治学院出講と併行するように「珍太郎日記」を雑誌『主婦之友』に 1920 年 1～12 月に、「續珍太郎日記」を翌年 1～12 月に連載していた。『主婦之友』社の石川武美が彼に創作作品の執筆を勧めたからであった。

「主婦采配記」という翻訳物を一年連載した後、「今度はひとつ創作をやってみませんか？」と石川さんが勧めてくれた。これは私が思いもかけないことだった。私はもう十年も学校の教師をしていたから、文筆はせいぜい翻訳ときめていた。原文から離れて書けるものでないと思っていた。「駄目でしょう」と言って、辞退に傾いたが、石川さんは大丈夫だからと保証してくれた。これが転機になって、私はそれから七八年つづけさまに、「主婦之友」に連載を書いた。そのうちに他の雑誌にも書き始めて、どちらが副業かわからなくなったから、申しわけないと思って教師の方を辞して、小説専門になった。（清水農園の石川さん、p. 659）

随筆「先輩の死」から察するに、原稿料の相場が安いうちは翻訳でもよかつ

⁴⁰ 斎藤國治「日本のマーク・トウェイン」 第二次全集『第七巻』「月報 7」, p. 3.

だが、「原稿料が高くなり始めてからは翻譯が賣れなく」なってきた、同じ原稿料なら創作の方が求められるようになったので、上述の石川による働き掛けに至ったようである。佐々木にとってオリジナルな長篇小説は初挑戦であったから、『悪戯小僧日記』や『姑め采配記』で手慣れていた中流階級の家族風景を再利用するようになった。そのため「珍太郎日記」では、主人公の性格でも歳回りでも日記という枠組みでも、何から何まで10年前の『悪戯小僧日記』と設定が似てしまい、読む側の印象も混同してしまう。この時期の佐々木には、執筆していても翻譯や翻案と創作との色分けが明確ではなかったかもしれない。⁴¹

『悪戯小僧日記』からの影響ばかりでもなかった。6年後に彼が專業作家に転向する遠因となった「珍太郎日記」について、本人は「初めての創作でしたから…比較的實在人物に富んでゐます」⁴²と述べていたから、周囲への取材も怠らなかつたようだ。なるほど第4回に、「この叔父さんはお父さんの一番の弟で矢張り学校の先生だ。もう二人叔父さんがあるけれども、一人は牧師で一人は裁判官だ。」（第一次全集『第一卷』、p.117）とあるのを読めば、それぞれが佐々木の実弟順三、二郎、義朗に対応することに思い当たる。つまり主人公の上村珍太郎は、佐々木家の周辺に起こる事件を諧謔的に語っていることになる。但し、珍太郎は12歳にしては観察力が鋭く、「鴨川の水と双六の賽は昔から言うことを聞かないのが相場のもの」（第14回、p.193）と大人びた口の利き方もすることから、この少年は漱石における“猫”のごとき観察者の役割を担っていると判る。それならば苦沙弥先生に相当するのが珍太郎の父親であろう。大学で外国語を教える四十代の上村哲（なんと、筆者と同名ではないか！）というから、当時37～38歳になっていた邦自身がモデルであることは一目瞭然である。ということで、上村教授に投影された英語教師らしさをこの作

⁴¹ たとえば第21回の「蟻の話」では、Mark Twainの*Tramp Abroad*（原著、pp.215-219）が模倣されていると、石原剛（2008）が指摘している（p.95）。

⁴² 第一次全集『第二卷』「月報第二號」に佐々木邦が寄せた「珍太郎日記」（pp.4-5）から。

品に拾ってみるのも面白からう。佐々木教授の姿を思い描く一助にしてみたい。

この語学教師は執筆にも携わっており、「お父さんは原稿を書く時には気に入らないところを書き直して貼り付ける癖がある」（第8回、p.145）くらいに性格が几帳面なので⁴³、作中では何事につけても一言居士振りを発揮する。第2回で distemper が話題になれば、「ジステンパーという字は昔は人間の病気にも使ったが…」と蘊蓄を傾けて、珍太郎からは「語学者は例によって言葉の吟味となると自分の畑だという顔をする」（p.101）と呆れられる。あるいは第20回で、娘婿に贈る結納品には「大英百科全書は何うだろう？」と提案して、今度は長女から「先方は英語の先生じゃありませんわ。」（p.256）と一蹴されてしまうように、口を開く毎に世間が狭いことを露わにしてしまうのである。

世間が狭いなりにも伸ばしてきた能力はあるようで、第4回では、試験後に自宅まで運動に押しかけてきた学生を相手に腹の探り合いを楽しんでから、「甘んじて落第するように切にお勧めする」（p.115）といなす老練振りを見せてくれる。さらに第18回では、「仏教学校で試験をするのは殊に残酷です。他の学校と違って学生の頭脳が皆悪いのですからね」（p.230）とぼやく元教え子の達海先生に、答案を見ないで公平な採点をする極意を伝授する場面では、佐々木教授の妙に生々しい存在感が同業の筆者を捕らえるのである。あるいは、大晦日に来宅した教え子が玄関先で「卒業論文は左利きの研究」と長広舌を揮うのに情性で耳を傾ける上村教授の姿（第13回、pp.185-188）には、学位を目指す水島寒月君が「蛙の目玉の電動作用に対する紫外光線の影響」についてする珍紛漢な説明に釣られて頷くだけの苦沙弥先生の姿が重ねられてくるし、とかく語学教師のイメージにつきまといがちな掴み所の無さが板に付いている。

⁴³ 筆者が所蔵する「求愛ABC」（1949）の第4回原稿でも、ほぼ毎頁が途中から貼り換えられていて、しかも上下の縁が揃えられているので、光にかざさないと見分けが難しいほどである。

英語教師の経験を織り込んだ「珍太郎日記」の成功で、佐々木は「やつて見ると、何でもなし。翻譯よりも樂だ。考へてさへかゝれば幾らでも書ける。但しこれは翻譯で長い間苦勞したお陰だつた。」(教壇から創作へ、p.361)と、翻譯の経験を小説執筆に活かせることを知って喜んでゐる。そんな調子であったから、翻譯からユーモア小説の量産へと舵が切られるようになった。その結果は、『講談倶楽部』の当時の編集者岡田貞三郎が、「なにせ佐々木邦さんが現われてくるまでは、ユーモア小説という名称さえなくて、滑稽小説とよんでいたくらい」(p.168)であったところへ、「この時期の佐々木邦さんの出現によって、日本にもユーモア小説の分野が、はじめて確立された」(p.171)と賛嘆したように、佐々木は日本の文壇に対して草分け的な役割を果たすようになったのである。

雑誌連載が増えるにつれて、英語教師としてコツコツ翻譯する時間は必然的に削られてしまうから、彼の翻譯家としての経歴は1922年を以て中断された。そこで、1918年の「主婦采配記」くらい1922年の中断までに彼が慶應教授として翻譯してきた作品をここで展望しておきたい。

アメリカ西部人の生活感覚と言葉遣いをユーモアたっぷりに描き出して喜ばれた Mark Twain は、本国では20世紀を迎えてから国民的作家としての地位を確立させたが、彼が潜ませていた悲観主義の深淵に本国の読者が気付く以前から、日本でも少年文学の作家として知られ始めていた。すなわち、1919年には佐々木が *The Adventures of Tom Sawyer* (1876) から(実質的には)初訳したし、次いで *Adventures of Huckleberry Finn* (1884) を1921年に初訳した。ユーモア文学とは趣を異にする *The Prince and the Pauper* (1881) を佐々木が訳出することはなかったが、村岡花子が追いかけるようにして1927年に『王子と乞食』の訳(初訳ではなかったが⁴⁴⁾)を出していたから、10年足らずのう

⁴⁴ 1899年に巖谷小波がこの作品を『少年小説 乞食王子』と題して初訳していた。

ちに邦訳され流布されたこの3作が日本でも Mark Twain の代表作として受け取られるようになった。そうしたなかで佐々木は、1916年既刊の『ユーモア十篇』という訳業も併せて、「日本のマーク・トウエイン」⁴⁵と譬えられるようになり、日本でのユーモア文学の第一人者と目されるようになった。

しかし、佐々木による翻訳は完訳ではなかった。『トム・ソウヤー物語』【1971】は石田英二訳（岩波文庫、1946）による完訳では560枚になるが、佐々木訳では約470枚であったから、多少は刈り込まれていたことになる。早速1948年には石田仁が原作との違いについて児童文学者の立場から、佐々木訳では欧米の文学に必須な「雰圍氣描寫」が削除された結果「文學的價値を著るしく害なはれ」ており、またアメリカの読者にとって「トムの中に自分を發見する」ために欠かせないはずの「内面描寫は常に簡略化されたり、全然省略され」たことを不満とし、日本の児童文学作家に見られる「少年達の低劣に媚び」る通弊を憂えた。更には、「トムとベッキイとの初戀、及びそれに伴ふ嫉妬」の挿話を省略したり、叔母や先生から折檻される場面を「著るしく緩和」させる配慮に災いされて、「翻譯の名に値ひしない勝手な焼き直し」になってしまい、原作品が「興味本位の愚劣な通俗作品」に貶められたと糾弾した。手厳しいだけに再々検証の必要も感じるが、佐々木訳を読む際にはいちおう留意しておいてよい指摘なのであろう。

勝浦吉雄（1980）は第七章の「ダニの競技と心の痛手」を原文に照らしながら、「学校内における男女生徒の恋愛ごっこをどうやって切り抜けるかに腐心した結果が、ここのところだけ、翻訳ともつかず、翻案ともつかぬ中途半端な訳になってしまった」（p. 230）と述べている。原文の第VI章末尾近くでも、Tomが教室で石版に書いた“I love you.”を隣席のBecky Thatcherに読まれてしまう経緯（あるいは読ませるための懸け引き）の半頁分（pp. 70-71）

⁴⁵ 匿名記者「佐々木邦先生（三）」第一次全集『第八巻』「月報第八號」, p. 4.

が、佐々木訳 (p. 81) では Tom が「これから仲善しになりませう。」と言って、Becky が「え、。」と応える 2 行に圧縮されている。異性愛に対する過剰反応は人物造形を損なうことになったかも知れない。更に石原剛 (2008) も「二つの点で原作に大幅な変更が施されて」いるとして、「土着的な話し言葉を標準的で丁寧な日本語に改変」し、「ことごとく恋愛を臭わせる場面は削除されている」(pp. 64-65) と教えている。石田英二訳が実現したのが 1946 年 5 月であったから、勝浦 (1980) が言うところの「明らかに訳者の意図的な改作」(p. 225) が日本の読書界では少なくとも一世代間にわたって『トム・ソーヤー物語』の標準版として流布されていたことになる。

2 年半後の『ハックルベリー物語』【2191】の翻訳でも同様で、中村為治訳 (岩波文庫, 1941) が 850 枚あるのに佐々木訳では 450 枚しかないから、半分近くに圧縮された抄訳であったことになる。2008 年に石原⁴⁶ は、「ひとことで言えば、佐々木邦訳『ハック・フィン』は、同訳者の『トム・ソーヤー』よりもさらにトウェインの原作との乖離が激しい。」(p. 67) と前置きしてから、「『ハックルベリー物語』では、ヴァナキュラーな声は無視され、ハックはかなりの程度までお行儀がよくセンチメンタルな少年に作り替えられ、ジムは軽視され、そして人種主義や奴隷制へのトウェインの風刺は削除されることになった。」(p. 68) と、やはり手厳しい。その少し前の英文による論考で石原 (2005) は同様の指摘⁴⁷ と一緒にこうした改変の背景にも触れているので (p. 32), それを石原自身の日本語による論考 (2010) から引用しておこう。

⁴⁶ 石原 (2008) は「第二章 ハックに何が起こったか? : 佐々木邦訳『ハックルベリー物語』」(pp. 61-100) において原作を佐々木がどう改変したかを念入りに論じており大いに示唆に富むが、忠実に訳された箇所にも籠められた佐々木の意図にも読者の注意を喚起している (pp. 91-94)。

⁴⁷ 石原 (2005) は、当時の日米の児童文学の状況にも触れながら、佐々木による改変例を具体的に指摘していて参考になるが、佐々木の意図に照らしたり時代的制約を勘案したうえで彼の功績を検討するよりも、原文との乖離の方により注視しているようだ。

つまり、佐々木が『ハック・フィン』に求めていたものは、もうひとつの『トム・ソーヤー』だったのだろう。つまり、子どもっぽい想像の世界に生きるロマンティックな少年トムが支配する世界であり、皮肉にも偽善と不正と残虐性と差別に満ちた大人社会に翻弄^{ほんろう}され真剣に直面せずにはいられないハックのリアルな世界ではなかったのである。その意味において、トムは佐々木にとって、諷刺と社会批判に満たされたトウエインの危険な世界から『ハック・フィン』を救い出すうってつけの救い主であったといえる。（p. 338）

これは、佐々木が「はしがき」で「矢張り「トム・ソーヤー物語」のやうに冒険好きで進取的なアメリカ少年の生活を描き出した」と表明した翻訳者としての姿勢を裏書きすることにもなる。そのように改変の多い佐々木版であっても、1921年9月10日に初版、同9月15日に再版、同20日に三版と好調に売れていた。中村為治訳が読めるようになったのは1941年2月（上巻）と5月（下巻）であったから、こちらの忠実訳が登場するまでは約20年で、『トム・ソーヤー』の場合よりも待ち時間は短かった。『ハックルベリー物語』が潜ませている深遠な文学性が完訳の早期実現を期待させたのであろう。

このような功績から、佐々木は「日本のマーク・トウエイン」と捉えられがちなのであるが、彼の明るく気楽な作品世界は「諷刺と社会批判に満たされたトウエインの危険な世界」とは一致しないことに、読み比べてみれば気付くはずであり、たとえば亀井俊介も次のような感想を洩らしたことがあった。

佐々木邦の小説を読んでいると、あれだけマーク・トウエインを愛読し、翻訳紹介し、みずからも影響を蒙ったことをすすんで認め、「国際マーク・トウエイン協会」なるものの名誉会員に推されたほどの人が、これだけ違った文学を作ったことに、私は非常な興味をそそられる。（p. 261）

しかし、こうした評価は、佐々木本来の文学の形成に資したであろう数々の訳業のうち Twain 作品のみを注目しての誤解なのではあるまいか。上述の訳業に挟まれた時期にも佐々木は、*Punch* 誌の常連でもあった英国の「獨創的な諧謔小説家」Thomas Anstey Guthrie (1856-1934) の著 *Vice Versa, or A Lesson to Fathers* (1882) を、「面白味の上からも其儘譯す事は出来ず、大略のところを傳へる方針で書き直し」(はしがき) 邦訳した『あべこべ物語』【2051】を出版していた。超訳という手法では Twain の場合にも通じるが、父と息子の外見だけが入れ替わるという佐々木好みの荒唐無稽な物語であった。女子生徒をめぐって男子生徒の間に恋の鞘当てもあつたりはするが、「是は面白い！ 近頃にはない笑ひ草だ」と作中人物が「一しきり笑ひ転げた」(p. 351) ほどには、残念ながら、読者を笑わせてくれない。穏やかなユーモアで「子供に冷淡なお父さん達」に「教訓を與え」ようとする他愛ない寓意物語であつて、Twain 流の辛辣な諷刺も込められていないが、それだけに『あべこべ物語』は佐々木作品の雰囲気よりもより彷彿させているように思える。

英語による、あるいは英訳された小説を邦訳するというこれまでの文筆活動から、彼が創作小説に軸足を移すようになり始めたのは、フランスの Alain René Le Sage による典型的なピカレスク小説 *Histoire de Gil Blas de Santillane* (1715-35) を訳出した頃であつた。例によって英訳本を用い、1922 年には原作の 5 分の 1 ほどを抄訳した【22Z1】を出版している。既に【0971, 1441】として佐々木が抄訳していた Miguel de Cervantes の *Don Quixote* (前篇：1605, 後篇：1615) にもピカレスク的要素があつたし、【1391】の原作である Charles Dickens の *Posthumous Papers of the Pickwick Club* (1836-37) もまたピカレスク的であつたから、こうした傾向の文学を佐々木は好んで邦訳してきたことになる。但し【1391】の枠組みを利用して彼が『主婦之友』に連載(1922 年 1~12 月)した「ぐうたら道中記」は、観光案内に毛の生えた程度の作品でしかなかったから、実際にピカレスク形式の小説を創作するとすると、彼の手法

には馴染まなかったようである。

ところで Dickens は、彼の代表作品のひとつである半自叙伝的小説 *David Copperfield* (1849-50) のなかで、主人公 David に

From that blessed little room, Roderick Random, Peregrine Pickle, Humphrey Clinker, Tom Jones, the Vicar of Wakefield, Don Quixote, Gil Blas, and Robinson Crusoe, came out, a glorious host, to keep the company.

(Chapter IV)

と語らせているが、Wakefield の副牧師を除いた全員がピカレスク小説の主人公なのである。佐々木もそれらの作品を読んでいたか、少なくとも David が愛した登場人物たちに関心は覚えたであろう。しかも挙げられた始め 3 人のピカロがそれぞれに活躍する 3 作品の著者 Tobias Smollett (1721-71) は、*Gil Blas* を 1749 年に、*Don Quixote* を 1755 年に英語へ全訳していたくらいであるから、佐々木の気質は Mark Twain 以上に Smollett の作風に近かったように思えるのである。Thomas Seccombe 編集の Smollett 全集 (1899-1902) も流布版として当時の日本にも舶載されたはずなので、佐々木が精力的に翻訳を続けていたなら、ユーモア満点の Smollett 作品の訳出に、赤面させる言及には戸惑わされながらも、挑戦していたかもしれない。

しかし 1922 年を最後最後として慶應義塾大学を退職するまでの 5 年間に、彼は翻訳をほとんど発表しなくなった。⁴⁸むしろ創作活動が活発になり、第二次全集『補巻五』のために岡保生が作成した「著作年表」で数えると、この時期に雑誌連載を 15 本、雑誌の一回物や単行本に至っては 42 作も執筆していたこ

⁴⁸ 但し、『法螺男爵旅土産』【0941】を土台に原作から補って口語調に刷新した『ほら物語』【2691】は創作的傾向の強い翻訳で、当時の数少ない佐々木の訳業として R. Kipling 著 *Just So Stories* (1902) からの抄訳約 100 枚が併載された。

とになる。慶應退職に先立つこと1年半の1926年10月に、明治学院に出講することも辞めていた。表向きの理由は「或時院長が部長の首を切つた。その部長は戸川[秋骨]さんの先輩だつた。戸川さんも私もその人に頼まれてその人を援助するため講師になつてゐたのだつたから、院長の處置に對して甚だ平らかでない。」(先輩の死) というものであった。しかし実情は、講師料と原稿料を天秤に掛けながら仕事を整理しなかったのではなからうか。慶應を辞職する気になったのも同じ動機が多少は働いていたであろうと筆者は想像するのであるが、どうであろうか。

《翻訳・翻案作品》

【1831】 佐々木邦 「諧謔小説 主婦采配記」『主婦之友』 東京家政研究會 「第一回 私といふもの」：第2巻3號 1918(大正7年)3月1日 pp. 114-129 / 「第二回 長女の縁談」：第4號 4月1日 pp. 132-151 / 「第三回 厄介息子」：第5號 5月1日 pp. 110-124 / 「第四回 長女の新家庭」：第6號 6月1日 pp. 114-126 / 「第五回 林檎のプツゲン」：第7號 7月1日 pp. 124-138 / 「第六回 次女の縁組」：第8號 8月1日 pp. 108-121 / 「第七回 獨逸婿」：第9號 9月1日 pp. 108-121 / 「第八回 性分といふもの」：第10號 10月1日 pp. 132-143 / 「第九回 人形嫁」：第11號 11月1日 pp. 116-129 / 「第十回 孔雀の羽」：第12號 12月1日 pp. 112-124.

【原著】：George Robert Sims, *Memoirs of a Mother-in-Law* (1892). Sims (1847-1922) は London 生まれのジャーナリストであり小説も多数書いていたが、文学史に残るほどの作家ではなかった。その後、再評価があったのか、2014年になって原作が London の Alma Classics から上製本で再刊された。

【再録】：『姑め采配記』【1921】と改題されて単行本化。再度改題して『娘の婿たち』 京文社 1926年8月5日。『世界ユーモア全集』【3281】 pp. 3-258.

【18Y1】 佐々木邦（譯註）「The True Legend of Prince Bladud By Charles Dickens」『英語文學』 緑陽社 第1回：第2巻4號 1918(大正7)年11月1日 pp. 33-36 / 第2回(完)：第5號 12月5日 pp. 16-21.

原作の *Posthumous Papers of the Pickwick Club* (1836-37) は【1391】として第34章まで抄訳されていたが、ここでは第36章を、挿話を僅かに刈り込んだ原文を忠実に邦訳し注を添えている。しかし忠実訳が佐々木の肌に合わなかったのか、この訳文はむしろ原文より読み難い。注釈では語法上の説明が詳しく、「這麼矛盾を斯う白々しく書くのが Dickens の humour の常套手段の一つである」といった穿ったコメントも見られる。

【1921】 佐々木邦（譯）『風刺諧謔 姑め采配記』 弘學館 1919(大正8)年2月26日 《15×10.3 ㌘ / 365頁 / ㊦0.⁹⁵》。

雑誌連載の「主婦采配記」【1831】を改題して単行本化したもの。「はしがき」で佐々木は、「日本の嫁たるもの、又姑たるもの、領きさうな箇所が澤山あるやうに思はれる」と、本作への自信のほどを窺わせている。

【再録】：『娘の婿たち』 京文社 1926年8月5日 《19×13.5 ㌘ / 325頁 / ㊦1.⁹⁰》。この京文社版の「はしがき」に、「大層面白い…。英国の諧謔小説として標本的のもの…」と太鼓判を押しているように、佐々木文学の面白さを先取りするような作品である。『世界ユーモア全集』【3281】にも「娘の婿たち」として再録された (pp. 3-258)。

【1971】 マーク・トウエーン（作）/ 佐々木邦（譯）『世界少年文學名作集 第1巻：トム・ソウヤー物語』 家庭讀物刊行會 / 精華書院 1919(大正8)年7月15日 《19×13.5 ㌘ / 2+2+4+438頁 / 非賣品》。第二版は1920年8月25日刊行。

【原著】：Mark Twain, *The Adventures of Tom Sawyer* (1876)。

勝浦（1980）は「トムがベッキー・サッチャーに求婚するくだり」を例に、本書が「訳者の意図的な改作」であり「翻訳ともつかず、翻案ともつかぬ中途半端な訳」になっていると指摘している（pp. 225, 230）。また初版の最終頁（p. 438）には、訳者に了承を求めないまま「編輯者に於て文章字句の上へ添削を加へ」て「譯文としては原義に遠ざかるやうな結果を生じた」と記されているが、第二版からはその添え書きが無いので、佐々木も了承しているであろう。佐々木訳の再版の下限は、（国会図書館所蔵の）講談社版世界名作全集の1957年版と思われるが、その後も児童書において度々借用されたであろうことは想像に難くない。

【再録】：一部を挙げれば、『トム・ソウヤーの冒険』春秋社 1925(大正14)年12月9日(世界名著撰家庭文庫)《19 ㊦/ 352 頁/ ㊦1.⁸⁰》。「トム・ソウヤー」と改題して【2931】に収録。『トム・ソウヤーの冒険』大日本雄辯會講談社 1939(昭和14)年5月22日《函 19×14 ㊦/ 358 頁/ ㊦1.⁵⁰》。『トム・ソウヤーの冒険』大日本雄弁會講談社 1950(昭和25)年8月25日(世界名作全集8)《函 19×14 ㊦/ 358 頁/ ㊦180》。

【2051】 アンスチャー（作）/ 佐々木邦（譯）『世界少年文学名作集 第11巻：あべこべ物語』家庭讀物刊行會/精華書院 1920(大正9)年5月20日《函 19.5×14 ㊦/ 368 頁/ ㊦2.⁵⁰》。【原著】：F. Anstey [Thomas Anstey Guthrie, 1856-1934], *Vice Versa, or A Lesson to Fathers* (1882)。

完訳であれば600枚強になろうが、400枚弱しかない抄訳で、「はしがき」に「子供に冷淡なお父さん達に教訓を與える積もりと見受けられます。原書は可なり大きなものですから、頁數の都合からも面白味の上からも其儘譯す事は出來ず、大略のところを傳へる方針で書き直したやうなものです。」とあるように、小説家としての佐々木の作風を予想させる小気味よい筆遣いで綴られている。

【2191】 マーク，トウエーン（作）／佐々木邦（譯）『世界少年文學名作集 第19巻：ハックルベリー物語』家庭讀物刊行會／精華書院 1921(大正10)年9月10日《函19.5×14.5 ㇿ/ 2+433頁/ ¥2.⁵⁰》。同月20日の第三版で記述した。奥付に拠ると第二版は同月15日なので，好評であったと察せられる。

【原著】：Mark Twain, *The Adventures of Huckleberry Finn* (1884).

【再録】：中村為治訳（1941）が登場した後でも，佐々木訳は手頃な児童書として再版が繰り返されていた。主だったところでは、『ハックルベリーの冒険』大日本雄辯會講談社 1946(昭和21)年12月20日(世界名作全集8)《函18.5×13 ㇿ/ 2+4+338頁/ ¥20》。『ハックルベリーの冒険』大日本雄弁會講談社 1951(昭和26)年5月10日(世界名作全集19)《函19×14 ㇿ/ 351頁/ ¥200》。未見であるが，1963年2月の『ハックルベリーの冒険』（小学館少年少女世界名作文学全集41）《19 ㇿ/ 317頁/ ¥220》あたりが再版された下限であろう。

【22Z1】 ラ・サージ（著）／佐々木邦（譯）『七轉び八起き物語』弘学館 1922(大正11)年12月15日《函19.5×13.7 ㇿ/ 330頁/ ¥2.⁰⁰》。

【原著】：Alain René Le Sage, *Histoire de Gil Blas de Santillane* (1715-35).

杉捷夫訳（岩波文庫，1953-54）で全篇が2,200枚なのに対して佐々木訳では450枚しかない。「はしがき」によると，2種類の英訳本を底本にして「極く面白いところ丈を書綴つた」全51回からなる抄訳である。原作を同じくする40枚の【1031】で訳出されていたエピソードも第20, 3, 37~39回で再登場するが，新たに訳し直した別訳のようである。

【2691】 佐々木邦（譯）『諧謔奇譚 ほら物語』京文社 1926(大正15)年9月20日《函19.5×13.6 ㇿ/ 261頁/ ¥1.⁵⁰》。「諧謔奇譚」は函と背表紙に

のみ表示されている。【原著】：Rudolf Erich Raspe 訳 *Baron Munchausen's Narrative of his Marvellous Travels and Campaigns in Russia* (1785).

「ほら物語」 pp.1-144. 概ね『法螺男爵旅土産』【0941】の構成に沿って、厳めしく勿体ぶった50枚の語りであったのが、寛いだ口語調に改められ、原作からも補われて130枚に膨らんでいる。特に佐々木訳の第16~17回 (pp.102-126) は新井皓士訳の「世界の真ん中をつきつた旅…」に内容で対応しているし、第18回 (pp.127-144) は驚にさらわれてアメリカ見物をする話であるが、共に【0941】には訳出されていなかった。佐々木の筆は軽快そのもので、意識を乗り越して再話的な域に達している。それが18回に構成されているので、併載の「いかさまばなし」6回と併せて全24回連載の「至つて無邪気な…子供の読みもの」(はしがき)として、ひょっとしたら雑誌への連載が想定されていたかもしれない。

「いかさまばなし」 pp.145-261 【原著】：Rudyard Kipling 著 *Just So Stories for Little Children* (1902) の12話から、「(一) 王宮を蹂みにじつた蝶」(The Butterfly that Stamped) pp.145-170, 「(二) 海をおもちゃにした蟹」(The Crab that Played with the Sea) pp.170-194, 「(三) 獨り歩きをする猫」(The Cat that Walked by Himself) pp.194-219, 「(四) 象の鼻は何故長い」(The Elephant's Child) pp.219-236, 「(五) 豹の斑らは何故出来た」(How the Leopard got his Spots) pp.236-251, 「(六) 鯨の喉は何故せまい」(How the Whale got his Throat) pp.251-261 が訳出されている。

藤松玲子訳(岩波少年文庫, 2014)より字数で各2割ほど少ないのは文体上の違いであり、佐々木訳が「面白いと思ふものを書き直した」(はしがき)にしても、各話が短いために著しい改変を加える余地は少ない。それでも(六)では、原文を膨らませた佐々木の語りだが、“鯨”

と“^{ずる}狡^{うお}の魚”との遣り取りを下世話風に仕立てて面白さを増幅させている。

【2831】 マーク・トウエーン（作）／佐々木邦（譯）「百萬磅紙幣」『改造』第10巻3號 改造社 1928(昭和3)年3月1日 pp.117-136.

【原著】：Mark Twain, “The £1,000,000 Bank-Note” (1893).

【0991】に「千萬圓」として前半が訳出され、【1031】で訳了されていた。今回「百萬磅紙幣」と改題し、僅かに筆が入れられた。『改造』のこの号には「世界大衆文學全集解説」が挟み込まれており、そこには『マーク・トウエーン名作集』【2931】も並んでいるが、『名作集』には収録を予定されなかった本作が、Twainの面白さをアピールするサンプルとして、このタイミングで本号に掲載されたのであろう。

V. 1928（昭和3）年～1945（昭和20）年 專業作家の時代（44～62歳）

慶應を辞めてから10年ほど経った1936年に、佐々木は「教壇から創作へ」のなかで次のように回顧している。

教師の生活は大體に於て面白い。唯一つ英語の教師には悩みがある。それは教へてゐる書物の中に分らない箇所が出て來ることだ。種々調べて漸く分かる。前の晩に初めて分つたことを十年も前から知つてゐたやうな顔をして學生に教へる時には氣が咎める。これは實は昨夜調べたのだとは言へない。分かる場合はまだ宜いやうなことだけれど、大體斯ういふ意味だらうと言つて説明する時が辛い。のみならず、教場で失策ことがある。此方が間違つてゐ

て、學生の言ふことが本當だつたりする。外國語だから、無論力が足りない。英作文なぞ教へてゐて何も後暗い。私は自分の書いた文章を一字残らず黒板から拭き消して歸るのが常だつた。(pp. 361-362)

恐らく本音であろう。そうしたことに思い当たる筆者（藤井）が想像するには、佐々木は英語教師を続けているうちにそれを天職と実感できなくなっていたのではなからうか。勉強してみたところで所詮は外國語であるから、教へていて内容に確信を持たない場面にはしょっちゅう立ち至つたろう。例えば彼は『人生エンマ帳』（1963）の「覚え書き」でも、

森田草平氏は私と同じように小説家で英語の教師だった。私は交際はなかったが、ある会で氏の話したことを気の利いた注意として思い出す。それは語学の教師は時折教室で間違いをすることということで、その際一々訂正するのは考えものだというのであった。學生は教師がどこをどう訂正したかを忘れてしまつて、あの先生は間違つて訂正したということだけは覚えている。それだから訂正は一切しない方がいい。又一説である。

と回想している。佐々木が励行したかどうかは筆者も識らないが、同感するからには彼に思い当たるどころがあつたはずである。英語教師とは、学ぶ側との学力の差（すなわち経験年数の差）に援けられて成り立つ生業であるから、良心的であろうとすれば後ろめたく思い、そして彼のように他方面に活かせる才能に恵まれているのであれば、折あらば教職から足を洗いたいと考えたであろう。随筆「夢を樂む」のなかで、「教師をしてゐた頃は教室へ出掛ける時教科書が見つからなくて困る夢を見た。讀み始める頁が見つからない。教室が見つからない。物の見つからない夢が多い。」と洩らしたこともあるくらいだから、「教師の生活は大體に於て面白い」と言つてはみても、人知れずストレスを募

らせていたのではないか。売れっ子小説家として何本もの連載を抱えながら大学でも教えていけば、授業準備に割ける時間も制約されようし、必然的に不満が残る授業や失策も免れなくなろう。誠実な佐々木教授がそうした不安を感じてもおかしくはない。

第一次全集『第一巻』の「はしがき」から察するに、彼には二十数年にわたってユーモア文学の研究と翻訳に最善を尽くしてきたという自負があって、「私は現代英米のユーモア作家を見渡して、一人も恐るべきものを認めません。」と言い放っていたくらいであるから、二足の草鞋を脱いでしまいさえすれば、「教科書が見つからなくて困る夢」も遠退こうというものだ。授業や校務に煩わされずに執筆に専念して、効率よく稼ぐこともできよう。おそらくそうした諸々の事情が合わさって、彼は1928年3月に教壇を降りてフルタイムの作家に転業した。その結果誕生した佐々木邦というユーモア小説家とその文壇での活躍については、これまでに多くの論考が注目し、評価してきた通りである。

そこで、彼が退職後の作品に教師としての経験を投影させている様子を、少しばかり覗いておきたい。退職前後に発表された「苦心の学友」（1927-29）では、橋本先生が教室で「英語の先生から見れば英語の出来るものが一番豪い。⁴⁹しかしお互にもっと眼界を広くして、もっと大きいところから見なければいけない。」（第二次全集『第九巻』、p.67）と主人公の内藤正三君を論ずる件は、全英語教師に向けてのメッセージのようにも読める。あるいは、丸谷オ一が「戦前の日本の社会を描いた雄篇」（p.224）であると褒めていた長篇「地に爪跡を残すもの」⁵⁰でも、三須先生は「英語に限らず、語学ということは余っ程考

⁴⁹ 印象に残っている学生は誰かと聞かれた佐々木は、藤浦と獅子文六の名前を挙げたそうである。藤浦洗 「三田の佐々木邦先生」 第二次全集『第五巻』「月報5」、p.2.

⁵⁰ 1931年9月～1933年11月に『富士』に連載された。第二次全集『第六巻』から引用する。

えてみないといけない。語学は学問をする手段だ。学問そのものとはいえない。一度しかない一生だから、もっと気の利いたことを考えたら宜いだろう。」(p.70) と英語の道を志そうとする生徒に忠告を与えているが、現役英語教師であれば声高には主張し難い本音でもある。退職して部外者になった気楽さから、佐々木は数年前の所論を思い出して作中の教師に語らせたのであろう。

また漱石の『坊ちゃん』(1906)を意識して書かれたと思われる「奇物変物」⁵¹では、主人公は帝国大学を卒業後すぐに地方のある〇〇旧制中学校に赴任した25歳の新米教師大内四郎で、正義感に駆られた彼が、「山嵐」を思わせる数学教師の起こした教師昇級運動に巻き込まれて最初の一学期で免職になる。ところが在職中に「ラヴ・レター」(p.375)を秘密兵器の*Webster*に挟み込んで地元の女性をちゃっかりゲットしてしまう。つまり四郎は“坊ちゃん”顔負けの成果を携えて東京に舞い戻るといふ痛快な自叙伝的小説である。主人公が“坊ちゃん”のように数学教師ではなく、英語教師だったところが佐々木らしい。あるいは「英語の役徳」という章(pp.337-346)は、(彼を含む)外国語教師が心中に潜めている矜持を匂わせている。意中の女性から英文学の個人指導を頼まれて、四郎は長時間彼女と tête-à-tête の関係で過ごすという“役徳”に恵まれる。いっぽう同僚の国語教師からは、生徒に「先生、私は元来頭が好くありません。しかし帝大へ行って文科をやりたいんです。私のような頭じゃ英文学は逆もむずかしいですから、先生のやうに国文学をやりたいんですが、何んなものでしょうか?」と相談されて情けない思いをした、とぼやかれる。

教師が生業であった頃の佐々木には気苦勞もあつたろうが、そこから抜け出てしまえば、忌まわしい記憶も作品の素材に転用し得る懐かしい思い出に昇華していったかもしれない。「奇物変物」を追いかけるように連載された「凡人

⁵¹ 1928年9月～1929年11月に『富士』に連載された。第二次全集『第四巻』から引用する。

伝」（1929年4月～翌年5月）では、昇給を止められて「半殺し」にされていた岡山時代の経験が役立っていることは既に第III章で触れておいたが、東京に出た主人公は、「学校を三つ掛け持っている」から（p.237）「^{すっかり}悉皆で五十五時間さ」（p.346）と虚勢を張ったり、それでも「夜分内職仕事の^{ちよじゅつ}著述をやらないと食えない。読者諸君は近頃「英文和訳の秘伝」だの「和文英訳の秘伝」だのという小冊子⁵²が続出するのに気がついているだろう。あれは私が揚げている生活の悲鳴だ。」（pp.237-238）と、かつての嘆き節を諧謔的に誇張して愉しんでみせるだけの余裕が垣間見られるのである。

懐旧の念に浸っているばかりではない。20年に及ぶ英語教師兼翻訳家としての経験を通して得られた英語や英米文学への造詣も、専業作家に転向してからの創作にインスピレーションを与えていたことは想像に難くない。例えば『少年倶楽部』に1930年4月から2年間連載された小説「村の少年團」ちゅうのモチーフにしても、「宝探しや打ち捨てられた幽霊屋敷での冒険、そしてインジャン・ジョーを思わせるような暴力的な犯罪者の登場など、『トム・ソーヤーの冒険』と酷似した状況設定がなされている」（p.95）ことを石原（2008）が指摘している。

おしなべて佐々木の小説では、英米文学絡みの固有名詞が頻出し、それらが既に読者に共有されている知識であるかのように頭から決めてかかって、英米文学に親しんでいるとは限らない一般読者に気兼ねすることなく作中に闊歩している。そうしたこともあって丸谷オ一は「バタくさい、新しいスタイルの読物」（p.227）という印象を覚えたのであろう。

英米文学については視野がなかなか広い佐々木であったから、1931年の第一次全集「月報第三號」では Charles Dickens を頂点とする「英國のユーモリスト」を並べながら、Samuel Johnson（1709-84）の人間味に最も惹きつけ

⁵² 佐々木は慶應に転任した頃に、『英語の基礎』（1917）と『英語の精髓』（1918）を出版していた。

られたことを明かしている。同「月報第四號」でも、アメリカの Bret Harte (1836-1902) のことや、西部のユーモア文学の祖であり Mark Twain にも影響を与えた George H. Derby (1823-61) の著書で稀覯書となっていた *Phoenixiana* (1855) を入手した経緯などについて、「アメリカのユーモリスト」で触れている。翌 1932 年に出版された『世界ユーモア全集 1: 英米篇』には、Jerome K. Jerome の閑談的随筆やカナダの政治・経済学者 Stephen Leacock (1869-1944) による文化論も訳出しているなど、彼等への傾倒が佐々木のユーモア文学に隠し味を添えることになったと想像される。

開戦前夜の 1941 年に刊行された最初の随筆集『豊分居雑筆』⁵³には、彼のそうした英語教師振りを覗かせる小品が何点か収められているので、本論考でも考察の典拠として度々利用してきた通りである。具体的には、「思ひ違ひ、言ひ違ひ」、「國際マーク・トウエーン協會」、「趣味の遺傳」、「女の重要性」、「小さい理想」、「素人藝雑感」、「先輩の死」、「夢を樂む」、「書物と私」、「愛蘭ブル」⁵⁴、「偶然の威力」、「テーブル・スピーチ」、「ウエツプスターの記」、「不當の期待」が挙げられる。また併載されていた「世間と人間」と題された章ちゅうの「頓智秀逸」が「ユーモア小説家にはユーモアのストックが相応にある」由を伝えるが、そうした蓄積が後年の『ユーモア百話』(1958) や『英米小ばなし』(1964) に活用されていくのであろう。

彼と英語との接点を窺わせるこの時期の文章はこれだけではないであろうが、翻訳・翻案・創作以外の随筆的著述については包括的な書誌が作られていないようなので、他に何が書かれ何処に掲載されたかは未詳のままである。⁵⁵

⁵³ 『豊分居雑筆』(1941) は第二次全集『第五卷』に、『豊分居閑談』(1947) と『人生エンマ帳』(1963) は同『第十卷』に収録されているが、全集では重複する作品が削除・整理されているので、随筆作品については全集からではなく初版本に拠って掲載状況を把握した。

⁵⁴ Irish bull について、筆者(藤井)が J. Philip Gabriel 氏と編集した Richard Lederer (原著)『Anguished English』(研究社出版、1994年3月1日)に簡潔な説明と笑わせてくれる実例がある (pp. 44-47)。

⁵⁵ 随筆や英語関連の評論文については、調査が不十分なため初出に基づいた書誌に構

調査すべき先としては、主婦之友社や講談社の雑誌、英語学習誌全般、随筆集『人生縮圖』（1946）所収の「誤解」を最初に掲載していた慶應の『三田新聞』、「豊分居雑筆」を連載した雑誌『日本ユーモア』、明治学院による刊行物が考えられるが、まだまだあるに違いない。

《翻訳・翻案作品》

【2931】 佐々木邦 『マーク・トゥエーン名作集』 改造社 1929(昭和4)年3月3日(世界大衆文學全集10) 《15.5×10.5 ㌘/ 542 頁/ ¥0.⁵⁰》。

「抜けウキルソン」 pp.8-200. 【原著】：Mark Twain, *The Tragedy of Pudd'nhead Wilson* (1894). 勝浦 (1980) は、佐々木訳には「男女間の問題になると、軽いタッチで流してしまう」(p.222) ところもあり、「大ざっぱに見れば、これも全訳と言えそうだが、矢張り完訳とは言えない」(p.217) し、「厳密な意味での逐語訳とは言い難い」(p.219) が、「実に素直な読み易い文章」(p.221) になっていると評している。

「トム・ソウヤー」 pp.201-487. 【初出：1971】

「社會改良家」 pp.488-513. 【初出】：「負けない男」【1691】を改題。

「死んで生きてゐる話」 pp.514-531. 【初出】：「天才畫家」【1691】を改題。

「跳ね蛙」 pp.532-542. 【初出：1261】

【再録】：『マーク・トゥエーン名作集』 改造社 1939(昭和14)年8月10日(世界大衆文學名作選集11) 《17.8×11.8 ㌘/ 542 頁/ ¥0.⁸⁰》。紙装による再刊では口絵が省かれ、「はしがき」は2頁の新稿に差し替えられた。元の「彼の諧謔の皮下には虚偽の世に對する熱烈な憤激がある。…一般社會よりは一段高い道德觀を持つてゐて、世間を覺醒しようといふ願望を持つてゐる偉大な

成できない。故に、さしあたりは適宜本文ちゅうで言及するにとどめざるを得なかったことを遺憾とする。

ユーモリスト」という賛辞が消えて、「ハックルベリー」の方が更に好いといふ人が多いけれど、私は「トム・ソーヤー」を採る」との立場が示されている。

【3281】 佐々木邦（譯）『世界ユーモア全集 1：英米篇』 改造社 1932(昭和7)年8月12日 《函 19.5×14 ㌘/ 464 頁/ ¥1.²⁰》。

シムズ [George Robert Sims] (英國)

「娘の婿たち」 pp. 3-258. 【初出】：「主婦采配記」【1831】を改題。

マーク・トウエーン (米國)

「百萬磅紙幣」 pp. 260-300. 【初出】：「千萬圓」【1031】を改題。

「ミス・エスキモ어의ローマンス」 pp. 301-330. 【初出】：「エスキモア乙女物語」【1691】を改題。

「貴族病者」 pp. 331-341. 【初出】：1691】

「勧誘員の話」 pp. 342-353. 【原著】：“The Canvasser’s Tale”(1876).
桁の多い数字を適当に移している意外は原文に沿った忠実訳。

リーコック [Stephen Leacock] (加奈陀)

「講演家の悲哀」 pp. 356-377. 【原著】：*My Discovery of England* (1922)⁵⁶ の第 IX 章 “We Have With Us To-night”. 講演会場での司会者の百態。

「千年後」 pp. 378-399. 【原著】：*Nonsense Novels* (1911) の第 X 章 “The Man in Asbestos: An Allegory of the Future”. 地名は日本化。

ジェローム [Jerome K. Jerome] (英國)

「閑人閑語」 pp. 402-464. 著者 Jerome が、良書百選に読み飽きたら半時間も読むと気晴らしになろうと勧める *The Idle Thoughts of an Idle*

⁵⁶ 『私の英國発見』（慶應義塾出版局、1924年12月25日）の訳者石田新太郎は、「序」で「同僚佐々木邦君の援助に負ふところ多かつた」と謝していたが、佐々木によるこの訳文の方が潑刺としていて読み易い。

Fellow (1886) 所収 13 話題のうち始めの 6 題を、金に困る話～氣のふさぎ～空の空なるかな～處世の道～閑散無為～戀愛について、としてほぼ完訳するが、頻出する固有名詞には苦勞させられている様子。

【4151】 佐々木邦（譯）『全譯ベラミー』 大阪：昭文社 1941(昭和 16)年 5 月 30 日 《18.5×12.5 ㍉ / 716 頁 / ￥2.⁰⁰》。

【原作】：Guy de Maupassant, *Bel-Ami* (1885)。

訳文は、モオパッサン(著) / 小原侑(譯)『全譯ベラミー』 弘文荘書店 1923 (大正 12 年)6 月 22 日発行 と同一である。小原は佐々木の筆名だったか、あるいは佐々木が小原の下訳を勤めていたのかといった事実関係は未調査であるが、本書の表紙に佐々木邦譯とあるので、後日の参考のために記述しておく。また本書には「はしがき」や解説の類は一切無く、Maupassant という表示すらも無い。小原版(1923)の「序」が「原文に忠實な直接譯」であると言明していることから、フランス文学であれば英訳に頼ってきた佐々木の仕事では、どうもなさそうである。また彼には、原稿用紙で 800 枚規模の「忠實な直接譯」を発表した実績も無いことから、昭文社が明朗小説で定評のあった佐々木の名を借りて「其都度政府當局者のために刊行を禁止された」(序)よろめき小説を小原訳で再刊しようと企てたのかもしれない。いずれにしても、奥付には印紙が貼られておらず、定価表示の上に○で囲った停の字が見られるし、本書を所蔵する図書館が全く確認されないことから、昭文社が発売を見合わせたのかもしれない。

VI. 1945（昭和20）年～1964（昭和39）年 終戦～明治学院大学教授～最晩年（62～81歳）

大戦中は作品を減らしてきて1945年には新作を発表しなかったが、終戦の翌年からは執筆活動が旧の勢いを取り戻すようになった。まずは2冊の随筆集に元英語教師としての佐々木の片影が窺われる作品を捜してみると、1946年刊行の第二随筆集である『人生縮圖』に「先生」があり、「趣味の遺傳」と「偶然の威力」が『豊分居雑筆』（1941）から再録されていた。翌1947年の第三随筆集『豊分居閑談』には「英米笑話秀逸」、「誤用の数々」、「煙草の思ひ出」が新収録されており、「眠りと夢」、「書物と私」、「國際マーク・トウエーン協會」、「ウエツプスターの記」、「テーブル・スピーチ」、「思ひ違ひ、言ひ違ひ」は『豊分居雑筆』からの再録であった。しかし新たに読んだ4点の随筆からは教壇に立つ佐々木の姿は彷彿されない。退職してから10年や20年が過ぎると、現場での記憶も希薄になってくるのであろうか。

少し遅れて佐々木の自伝的小説「心の歴史」が雑誌『日本ユーモア』に連載された。⁵⁷やはり教壇での姿は描かれていないが、彼と英文学との親和性を窺わせる場面は多い。主人公丸尾善三（通称丸善）はミッションスクールである白金学院（白金は明治学院の所在地）の高等学部を卒業したが、失恋したことから、出世して恋敵を見返そうと渡米してIndianapolisに英文学を6年間学び、B.A.とPh.D.を得て帰国する。予定通り母校の教授に納まったが、女性問題で誤解を招いて免職になってしまう。その後実業界に転身して順調に出世したのであるが、結婚しないまま人生の盛りを逃してしまってから、改めて半生を回顧するという設定である。渡部昇一（1989）も「主人公の意見は佐々木邦個人

⁵⁷ 雑誌『日本ユーモア』の第2巻1號（文學社、1947年1月1日）～第4巻2號（日本ユーモア社、1949年4月1日）に連載され、単行本としては1949年6月10日に講談社から刊行された。2002年7月24日には外山滋比古編でみすず書房からも再刊されているが、引用に際しては第二次全集『第十巻』を用いる。

の意見と見なしてよい。というのはこの小説は彼の戦後の随筆集『人生エンマ帳』に示された意見と一致しているからである。」(p.34)と注目しているが、次のような丸善の所感でも、一般的な読者の興味の彼方で、佐々木の英文学への傾倒が表明されている。

若いボズウェルはジョンソン博士を招待したが、何か手違いが起こって、ひどく狼狽した。得られまいと思っていた知遇を得て間もないことだったから察しられる。しきりにお詫びを言ったら、^{グレート・モーラリスト} 大道德家は手で押さえるようにして、「君、心配しちゃいけない。二週間もたてば忘れてしまうことじゃないか？」

と教えた、ボズウェルのジョンソン伝は私の愛読書だ。私もこの人間味豊かな大道德家からどれくらい教訓を受けているか知れない。(p.134)

機会あれば英文学の知識を銜おうとするあたり、元英語教師には往々にしてありそうな性癖である。引退を控えた筆者（藤井）ならずとも、教壇を降りて20年を経た末の佐々木が作品の中で英文学や英語教師についてどのように蘊蓄を傾けているものか見てみたいではないか。ということで、回顧的長篇小説「心の歴史」の前半部にそれらしい場面を拾ってみよう。

甥から「英文学はそんなに面白いのですか？」と聞かれた丸善は、まず「何といっても、世界一の文学だからな」(p.111)と応じてから、英詩人としてGeorge G. Byron (1788-1824), Percy B. Shelley (1792-1822), William Shakespeare (1564-1616)を挙げる。しかし「殊に詩より散文の興味を持って、小説を余計読んで」(p.115)きた丸善には、Henry Fielding (1707-54)やThomas Hardy (1840-1928)の方に共感させたり、英詩というものは「余り面白いとも思いませんね。英語の力が足りないから、本当の味が分らないんでしょう。どうもピンと来ません」と言わせたりして、佐々木自身の嗜好が顔

を覗かせてくる。また従妹の光子を相手に、William Wordsworth (1770-1850) の詩について講釈もする (p.144)。そして先に引用したように、「ジョンソンだ。ジョンソンは^{グレート・モーラリスト}大道徳家と呼ばれたくらいだから、立派なものさ。おれはジョンソンを師表として仰いでいる」(p.112) と、口角に泡を飛ばさんばかりの勢いで丸善は思い入れを語るが、肝心の Samuel Johnson についての説明には思いが至ってない。往々にして英語教師が教室で陥りがちな独り相撲の場面を佐々木もまた現出させてしまっている。

英会話を教えていた美人教師に気に入られようとした白金学院での経験から、「語学は要するに訓練だ。ダンダンと耳も聞え、舌も廻るように」(p.125) なるとの信念を得た丸善は、大学には英語の出来ない英文学者が多いことを問題視して、「本当に英文学をやるには、西洋人と同じように英語が出来なければ駄目だ」(p.149) と力説する。英語教師としての当事者から部外者に転じた佐々木が、丸善の口を借りて警鐘を打ち鳴らしているつもりなのであろう。そんな丸善も留学先では指導教授から「母国語以外の文学を研究するのは、大きな引け目です。仮に私があなたの英語ほどの日本語を学んでいるとして、日本文学を研究したら、大家になれるでしょうか？」(p.173) と問い詰められたすえ、同じ努力をするなら文学研究よりも創作に努力するよう助言されるという経験もさせられていた。その結果、「英文学は英語だから、幾ら努力しても英米人に敵っこないという信念」(pp.173-174) に至った丸善は、このまま帰国したら「英語の出来ない英文学者」を一人殖やしてしまうだけと憂えるのである。佐々木本人は海外留学をしなかったが、ひょっとしたら丸善同様に自分の英文学研究に無力感を覚えた経験があって、それも彼が教壇を降りる一因となったかもしれない。そんな丸善が、「しかし矢っ張り先生でいれば良かったと思う。教員時代が一番面白かった」(p.111) と呟いたとき、佐々木の記憶のなかでは過去の教員生活が懐かしい思い出へと結晶化しつつあったのであろう。

そうしたタイミングで佐々木に教壇復帰の話が舞い込んできた。母校が1949年に新制の明治学院大学として発足して、66歳の誕生日を迎えたばかりの彼が同年5月に教授として就任した。1947年に小雪に先立たれていた彼は就任の前月に同じ鶴岡出身で36歳の新藤信子と再婚したくらいであったから、20年振りの現役復帰を果たせるだけのヴァイタリティと教職への郷愁とが彼にはあったのであろう。筆者（藤井）も同じ66歳を迎えようとしているが、その両方に欠けていることを遺憾とするものである。明治学院大学の佐々木教授は、小坂井澄によると、

執筆のかたわら週一回、英文学の作家作品論を講じた。これは七十九歳、つまり亡くなる二年前まで続けられた。自分の人生の出発であった教師の仕事に、愛着していたのである。

若い学生と接するのが嫌いではできないことだが、講義はいくら経験を積んでも余談や冗談で息を抜くわけではなく、聞き取りにくい籠り声で表現も巧みといえず、その意味ではあまり教師向きではなかった。（p.219）

しかし66歳という佐々木の年齢と作家業での多忙さを考慮すると、当時の教授の自由度がいくら高かったにしても、専任教授並のコマ数はこなせないはずであるから、「週一日ほど御出勤いただいて、お気の向くままに話をしてくださいれば結構です」くらいな申し出を承けての就任であったろうと想像される。何しろ日本を代表するユーモア作家であったから、広告塔としての役割の方が期待されていたことは本人も承知したはずである。そうした特別待遇でもなければ、彼ほどのヴァイタリティを以てしても79歳直前まで（つまり1962年3月まで）教壇に立ち続けるのは困難であったろう。

しかし大学教授として象牙の塔に身を置くようになって、このユーモア作家にアカデミックな感覚が募ってきたのであろうか、その頃の彼は英国のユーモ

ア作家 P. G. Wodehouse を「まあ、三流四流の作家ですね。あまりに通俗的で、文学史には載せられないでしょう」と、いかにも上から目線で退けたので鹿島孝二が驚いたこともあった。⁵⁸ 飽きもせず Wodehouse を教科書に愛用している筆者としては、近頃とんとアカデミズムと縁遠くなったせいか、彼のこの発言には違和感を覚えさせられた。佐々木のアカデミズムへの傾斜は『英語青年』に執筆するようになったことにも窺えるであろう。一例としては、1957年4月から連載「ユーモア講座（一）～（十二）」を寄稿している。⁵⁹

随筆「頓智秀逸」でも「ユーモア小説家にはユーモアのストックが相応にある」と述べていた彼は、それまでの英語小話の蓄積を『豊分居雑筆』（1941）を始めとする随筆集や『心の歴史』のような自伝的小説でさり気なく利用していた。しかし傑作な小話が一度の使用で御役御免ではモッタイナイと思ったのか、この「ユーモア講座」でも設定や見掛けを変えながら使い回されている。なかでも Blackie 教授の休講揭示はお気に入りの小話のようで、（一）に再あるいは再々登場する。このようにして、この連載はユーモアを醸す言語現象について話題を広汎に採りながら小話を幾つも紹介して、邦訳や語注やコメントと共に軽く読ませてくれる。しかし佐々木の愛読者には déjà vu の感覚に襲われることがしばしばで、ユーモアの諸相を論じた部分にも特段の創見らしさは見られない。やはり彼の本領は、『英語青年』に象徴されるアカデミズムよりも、善人が活躍する軽快で肩の凝らないユーモア小説の方にあつたのではないかと、かつてはアカデミズムの片隅に身を置いたこともある筆者には感じられてくる

⁵⁸ 「伸先生と邦先生：佐々木邦先生の想い出（11）」 第二次全集『補卷一』「月報 11」, p. 8.

⁵⁹ （一）：第 103 卷 4 号 1957（昭和 32）年 4 月 1 日 p. 26（170）/（二）：第 5 号 5 月 1 日 pp. 30（230）- 31（231）/（三）：第 6 号 6 月 1 日 p. 24（280）/（四）：第 7 号 7 月 1 日 p. 22（334）/（五）：第 8 号 8 月 1 日 p. 25（393）/（六）：第 9 号 9 月 1 日 p. 25（449）/（七）：第 10 号 10 月 1 日 pp. 36（516）- 37（517）/（八）：第 11 号 11 月 1 日 p. 25（617）/（九）：第 12 号 12 月 1 日 pp. 33（681）- 34（682）/[十]：第 104 卷 1 号 1958 年 1 月 1 日 pp. 31-32/（十一）：第 2 号 2 月 1 日 pp. 26（82）- 27（83）/（十二）：第 3 号 3 月 1 日 p. 25（137）.

のである。

しかしその連載の副産物と目される『ユーモア百話』が、追いかけるようにして1958年6月25日に研究社出版から刊行された。125本の小話を集めた本書の「はしがき」で、著者は「ユーモア研究の上から、私はそういう本を数多く持っている。その中から秀逸と思うものを選んだのだから、この小冊子の内容は英米の cream of humour とも言える。…一読、内容を知り、再読、言葉に親しみ、三読、人生と人間を知る参考にしてください。」と誘いかけてくるが、小説的でこなれた訳文、懇切だが不均質な注釈、意味深長な所感、微笑ましい誤植から想像するに、明治学院大学での講義もこんな調子だったのであろう。いかにも佐々木流のだらかきで執筆された英語学習書と評しておきたい。⁶⁰ もっとも、筆者の現場経験の範囲から言わせてもらえば、今の「英語」や「英語読解」の受講生の英語力ではほとんど手も足も出ない水準にある学習書と評せる。同じ大学教授でありながら、隔世の感を禁じ得ない。

“猫”ならぬ人間の“赤ちゃん”を観察者に仕立てて1957年から雑誌に連載していた小説「赤ちゃん」を、佐々木が自分で英訳して“A Kachan”の題で1959年から*The Yomiuri*紙に連載したことを、十和田操が「追悼：佐々木邦氏を偲ぶ」で教えているが、筆者（藤井）にはまだその記事を確認できていない。もっとも松井和男に拠ると、これはアメリカでの出版を想定しての英訳であったらしい。さらに松井（p.256）がその折の佐々木の談話を『文芸予報』（巻号不明、未見）から引用しているので、孫引きをさせて頂く。

こんどの仕事で感じたことは、自分ももう一度英語の教師をすとしたら、
go とか get, have といった短い字の使い方を研究してみたいと思ひましてね。
子供はそういう簡単な言葉だけで、けっこう何でも用をたしているのですし、

⁶⁰ 『英語青年』の連載「ユーモア講座」からも約1割の小話が再利用されているので、佐々木は手持ちの材料を精選して本書に集成しておきたかったのであろう。

やさしい言葉で何でも表現する研究が大事だと思いました。

彼が英作文も担当できる教師であったことは、『英語の基礎』(1917)と『英語の精髓』(1918)によって十分察せられるが、ひょっとしたら C. K. Ogden と I. A. Richards が 1930 年に共同で案出した Basic English を明治学院大学で教えていて知るようになり、英訳に際してそれを意識したかもしれない。⁶¹ それから 3 年後の 1962 年にも、彼は自信作『心の歴史』を英訳することになる。

75 歳で『ユーモア百話』(1958)を出版した頃から、執筆する小説が平均すると年 1~2 作に減っていった。連載の締切に追われない悠々自適の生活に切り替わり始めたようだ。小坂井澄 (pp. 222-223) に拠ると、1960 年に Chicago のビジネス・スクールに留学する予定のとも子(長女の忘れ形見)のために、彼は前年から A. C. Doyle (1859-1930) の Sherlock Holmes 物や Hardy の短篇をテキストに英語の手解きをしていたそうであるが、「明治学院大学での講義と同じ調子で、文法的な説明はあまりせず、自分でも楽しむように読んでいった。」らしい。確かに『ユーモア百話』でも彼は文法的な説明はせずに表現の応用例を示して済ませる解説が多かったから、教室でも短篇を訳読しつつ、時に表現上の説明をしたり、英作文に応用させたりする授業振りであったろう。

そのようにして 1961 年度末まで教壇に立ち続けながら、気の向くままに『英語青年』にも筆を執り続けて、『ユーモア百話』の前月には「Punch, 英国ユーモア」⁶²を寄せていた。これはなかなか読み応えのある記事で、ユーモアを「人生の absurdities を keenly に認め、それに対して broad-minded な諦めを持つ心」であると定義するとともに、それが英国に育まれてきた証しとして *Punch*

⁶¹ 佐々木は「赤ちゃん」を自分でどう英訳したであろうか、直訳か意識か、それとも翻案だったのか、全訳か抄訳かといったことも確認したいものである。

⁶² 『英語青年』 第 104 巻 5 号 (1958 年 5 月 1 日), pp. 34(258) - 35(259)。

誌の存在があり、それを「味うに好適の書物」が *The Life of Samuel Johnson* (1791) であると唱えている。その著者 James Boswell (1740-95) がユーモアを意図していたかどうかは別として、読みこなすにはユーモアに共感できる程度に想像力が不可欠であるという見解なのであろう。Hardy についても「叙述にやはりユーモアがある」ことを指摘している。翌々年の「英語とユーモアの表現」⁶³ は、例を「Punch, 英国ユーモア」から摘まみ食いをするばかりの記事で得るところは少ない。永く教師を生業にしていると喋りがくどくなってくるが、佐々木は無口な方であったから文章の方で繰り返しが多くなったようである。同じ頃、他誌に「Mark Twain について」⁶⁴ も発表していた。これは人名辞典の項目のような記事であるが、国際 Mark Twain 協会の日本代表であった西川玉之助 (1964-1954) という実業家が「金に糸目をつけずに集めた」膨大な Twainiana を関西学院大学に寄贈したという、他からは得られない取って置きの情報で目を惹く。

佐々木は 1962 年 3 月に明治学院大学を退職したが、その年の正月に『英語青年』が掲載した「英語初笑い」⁶⁵ は、「英語とユーモアの表現」と同様に、再登場のネタに新しいものを少し混ぜ込んだ程度の記事であった。そして 3 月の「語田引水」⁶⁶ により、英語教師は他教科担当者に較べて常識に富み、服装もスマートで、父兄からも担任に望まれがちであったと、かつて『奇物変物』でも弄んだ、彼なりに温めてきた優越感を嘸み締めながら、79 歳の誕生日を目前にして英語教師生活にピリオドを打った。

1962 年の 5 月 20 日には『英米小ばなし』（研究社出版）が、前作の『ユーモア百話』と全く同じコンセプトで 127 話を集めて出版された。使い回されて

⁶³ 『英語青年』 第 106 卷 10 号 (1960 年 10 月 1 日), p. 24 (528).

⁶⁴ 『米書だより：A Monthly Review of American Books』 第 92 号 (米国大使館文化交換局, 1960 年 11 月), pp. 32-36.

⁶⁵ 『英語青年』 第 108 卷 1 号 (1962 年 1 月 1 日), pp. 35-36.

⁶⁶ 『英語青年』 第 108 卷 3 号 (1962 年 3 月 1 日), p. 38 (158).

重複するネタは本書では少ないものの、珠玉に分類できる小話も少ない。英米文化に対する解説もややお座なりで、「Chinaは昔から支那だけれど、この頃日本では支那人の註文に従って、中国または中華民国と呼び、雑誌の原稿など支那と書くと記者は大急ぎで中国と書き直す。しかし英米では Red China と呼んでいる。」(第53話)といった注釈には彼なりの脱線への努力も察せられるが、four bits (第43話) や a half-crown (第47話) の説明ではしくじったりもしている。それでも、読み終えるまで読者に巻を措かせない面白さがこうした類の本には伴うものである。

1962年6月頃に『心の歴史』の英訳本 *The Reluctant Bachelor* 【6261】がアメリカで出版された。日本語による“原文”すなわち第二次全集『第十巻』で読むと、主人公の丸尾善三郎が「うっかり日本語で書き始めてしまったが、英文で書き直そうと思っている。」(p.212)と洩らしていることから、英訳版の作成は予定に織り込み済みであったのかもしれない。⁶⁷

英文版の目次を突き合わせてみた限りでは全篇をそのままに英訳しているようである。それでも、先ほど同作品から引用した Johnson 讚美の部分 (p.134) を英訳で読むと、第1段落が8割くらいの忠実さに英訳されたあと、第2段落に“Lord Macaulay is said to have gone through it thirty times.”(英文版, p.55) という文が挿入されていた。丸善が甥に向かって「文化というのは広い意味の文学」(p.114) と気焰を揚げた対話もそのまま英訳(英文版, p.7) されている。それでいて、今引用した「英文で書き直そうと思っている」(p.212) で始まり印税の皮算用もする辺りの1頁分は全く英訳(英文版, p.189) されていない。といった具合で、恐らくは佐々木が『心の歴史』の原文に筆を加え、日系と思しき Jiro C. Araki という人物が英語に訳し、そのう

⁶⁷ 主人公がアメリカへ留学するので、アメリカでの刊行と発売を考えていたとすれば、渡米したことのない佐々木も大胆であり、それだけ作品への自信も強かったということであろう。

えで、“Acknowledgement”でも謝意が捧げられている Miss Ruth Bellamy が仕上げを施すといった分業で英語版がまとめられたのではなかろうか。構文がアッサリとして不自然さを感じさせない英文に訳されていて、読み易いという印象を受けた。

佐々木にとっての最後の単行本は第四の随筆集『人生エンマ帳』で、1963年11月に出版された。そこに彼が英語教師であったことを窺わせる文章を拾おうとしたが、「奇縁」は「国際マーク・トウエーン協会」と同一内容であり、「頭の中の誤植」も「誤用の数々」と同じであるから、読むべきは、「スプーネリズム」, 「M.C.C.」, 「漢字はむずかしいが」, 「僚友秘話」, 「覚え書き」ちゅうの断片くらいしかなかった。それも思い出話の繰り返しや、毎度お馴染みの笑話で終わっている。英語教員としての実感が彼の記憶から更に希薄になってしまったのであろうか。

生涯をかけてユーモア文学に親しみ、そうした作品を読み、訳し、教え、書いてきた佐々木は、『人生エンマ帳』の著者紹介によると、「ユーモア文学の開拓に努め、幾多の秀作を発表して文学の向上に寄与した」功績により1962年に紫綬褒章を授けられた。彼の文学の原点は Mark Twain に遡れようが、Twainの晩年を支配した悲観的な暗さを佐々木は作品に持ち込むことをしなかった。だから佐々木の晩年には何一つも翳りが無かったかと言えば、そうでもなかった。晩年には、肉親の死を繰り返し経験させられる宿命を自分は背負わされているのではないかという思いに悩んでいたらしい。そのせいで、お気楽な Wodehouse を無邪気に愉しめる心境にはなかったとも考えられる。肉親に先立たれた晩年の Doyle は心霊術に凝るようになったそうである。Hardy についても、「邦はかなり以前から共感を深めていた。ハーディもまた、人間と社会のどうにもならない不条理を一方的に支配する巨大な意志あるいは力に対して、乾いた諦観の眼を注いだ作家であった。」と小坂井澄 (p. 223) は教えてくれる。⁶⁸

⁶⁸ 但し、創作手法では佐々木と Hardy とでは趣を異にしていたようである。「トマス・

孫のひとり佐々木真理の眼にも、「あんなに人を笑わせる可笑しい文章を書いた人だけど、本当は悲しい事の多い人生」だったのであろうと映っていた。⁶⁹

そうした思いを潜ませながらも家庭にくつろぐ佐々木の姿について、やはり孫である石塚雅子⁷⁰が、「祖父の作品の中によく一言居士や学校の先生が、言葉の講釈をする場面が出てくるが、祖父自身が時々、こういう人物そっくりになった。…もっとも祖父の場合は、作中人物のように雄弁ではなく、ポツポツとそれもうれしそうに目を輝やかかせて話すのである。」と語ってくれる思い出に接すると、おそらく彼も多くの元英語教師と同じ様な晩年を全うしたのであろうと想像されてくるのである。

《翻訳・翻案作品》

【5281】 原作オールドリッチ / 佐々木邦 『わんぱく少年』 大日本雄弁会講談社 1952(昭和27)年8月15日(世界名作全集38) 《函19×13.5 ㌘ / 335頁 / ¥200》。

佐々木の解説によると、原作者は Thomas Bailey Aldrich (1836-1907) で、Mark Twain より1年遅れて生まれ、3年早く死去した。原作 *The Story of a Bad Boy* (1869) は、主人公 Tom Bailey が活躍する自伝的小説で、Tom Sawyer や Huck Finn と同時代の、アメリカ北部での少年の生活を描いて Twain の両作品に「おとりまさりしないおもしろい物語」であるそうだ。

児童に読みやすいように、原作の全22章を邦訳では38章に小分けして、そのうえで原文の刈り込みを厭わず、直接話法を多用したり、説明的記述を混ぜ

ハーディなどは、主人公の性格、境遇などに合わせ、うまく筋を發展させてゆく。私もまねしてみました。どうにもうまくいきません。それというのも私には悪人が書けないんですね。」(鳥越信, p.186).

⁶⁹ 「祖父の思い出」 第二次全集『補巻二』「月報12」, p.5.

⁷⁰ 「祖父の目」 第二次全集『第一巻』「月報1」, pp.4-5.

込んだり、筆の遊びもあつたりする。訳文に散見される佐々木らしい筆遣いの一例を本書から引用しておこう。

He said the colors were pricked into the skin with needles, and that the operation was somewhat painful. I assured him, in an off-hand manner, that I didn't mind pain, and begged him to set to work at once.

（第 III 章，1942 年版で p.21）

「しかしトムさん，これはかくのでなくて，針でほりこむんだからいたいよ。」

「いたいぐらいがまんするから，ここですぐやってくれたまえ。」

「警察へとどけなければならぬ。」

「ほんとうかい？」

「うそだ。」

「それならひとつのむ。」

「よろしい。」と，ベン君はしょうちしてくれた。（pp.31-32）

こうした筆致であるから，翻訳では原作よりも枚数が膨らんではいるが，原作で女生徒が登場したり Tom が失恋を味わうといった章は，Twain の邦訳に對しても指摘されていたように，やはり簡素化されている。逆に，「幽霊話」や「霧の深い夜」と題されたユーモアたっぷりの話が，どこからともなく紛れ込んでいるところは，いかにも佐々木訳らしい。

【6261】 Sasaki, Kuni. *The Reluctant Bachelor: An Original Japanese Story*. Translated by Kuni Sasaki and Jiro C. Araki. NY: Vantage Press, 1962. 《21 × 14 ㊦ / 229pp. / \$ 3.⁵⁰》。

佐々木の代表作で自伝的な長篇小説『心の歴史』を英訳したもの。少数しか印刷されなかったのであろうか，CiNii で検索すると国内の図書館で 4 館しか所蔵していないが，インターネット上の“Open Library”を利用すれば無料でダウンロードできる。

【原文の初出】：「心の歴史」『日本ユーモア』 第2巻1号 文學社 1947年1月1日～第4巻2号 日本ユーモア社 1949年4月1日。

【原文の再録】：『心の歴史』 講談社 1949年6月10日。第二次全集『第十卷』 pp. 107-236。最近では外山滋比古(編)『佐々木邦：心の歴史』 みすず書房 2002年7月24日(大人の本棚)。

参考文献 (抄)

佐々木邦による翻訳本は
各章末に記述されている
函は筆者が確認したのみ

石田仁 「ゆがめられた「トム・ソーヤー」の翻訳」『生活学校』 青少年文化懇話會 第3巻4号(6月号) 巖松堂書店 1948年6月1日
pp. 42-45.

石原剛 「佐々木邦と Metta Victoria Fuller Victor」『英語青年』 第148巻3号 研究社 2002年6月1日 pp. 50(198)-51(199).

Ishihara, Tsuyoshi. "What Happened to Huck?: Kuni Sasaki's Translation of *Adventures of Huckleberry Finn*." *Mark Twain in Japan: The Cultural Reception of an American Icon*. Univ. of Missouri Press, 2005.
Pp. 10-35.

石原剛 『マーク・トウェインと日本：変貌するアメリカの象徴』 彩流社
2008年3月20日。

石原剛(他) 「日本におけるマーク・トウェイン」『マーク・トウェイン

- 文学 / 文化事典』 亀井俊介（監修） 彩流社 2010年10月25日
pp. 333 - 368.
- 『英語青年』 第110巻12号 研究社出版 1964年12月1日. 「追悼：佐々木邦氏を偲ぶ」（pp. 50(846) - 53(849)）を掲げる. なお『英語青年』には、佐々木の執筆した記事が約20本あるが、言及に際しては本論考の中で掲載先を示した.
- 岡保生（編）「年譜」『佐々木邦全集』[第二次] 第10巻 講談社 1975年7月20日 pp. 423 - 431.
- 岡保生（編）「著作年表」『佐々木邦全集』[第二次] 補巻5 講談社 1975年12月20日 pp. 421 - 433. 未定稿である由.
- 岡保生 「17 佐々木邦：「諧謔小説」創始の前後」『近代文学の異端者：日本近代文学外史』 角川書店 1976年6月30日 pp. 177 - 185. 【初出】：「圏外近代文学史（九）」『日本近代文学大系 第12巻：森鷗外集 II：月報54』 角川書店 1974年9月 pp. 5 - 8.
- 岡田貞三郎（述） / 真鍋元之（編）『大衆文学夜話』^{せいあほう} 青蛙房 1971年2月5日.
- 尾崎秀樹 『思い出の少年倶楽部時代：なつかしの名作博覧会』 講談社 1997年6月2日.
- 勝浦吉雄 『日本におけるマーク・トウェイン：概説と文献目録』 桐原書店 1979年11月10日.
- 勝浦吉雄 『翻訳の今昔：マーク・トウェインの言葉・日本人のことば』 広島：文化評論出版 1980年8月25日.
- 勝浦吉雄 『続 日本におけるマーク・トウェイン：概説と文献目録』 桐原書店 1988年10月15日.
- 加藤謙一 『少年倶楽部時代：編集長の回想』 講談社 1968年9月28日.
- 亀井俊介 「マーク・トウェインと日本の小説」『メリケンからアメリカへ：

- 日米文化交渉史』東京大学出版会 1979年4月25日 pp.223-265.
- 川戸道昭・榊原貴教(編)『明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》20:マーク・トウェイン集』大空社 1996年10月26日.
- 鴻巣友季子「第8章 原作はいったいどこに…?!:アンノウンマン『いたづら小僧日記』佐々木邦訳(明治四二年)」『明治大正翻訳ワンダーランド』新潮社 2005年10月20日(新潮新書138) pp.121-131.
- 小坂井澄^{すみ}『評伝 佐々木邦:ユーモア作家の元祖ここにあり』テームス 2001年7月26日.
- 佐々木邦『重要語句文例 英語の基礎:The Fundamentals of English』^{ていび}丁未出版社 1917年2月5日《函19.5×14^{センチ}/ xiii+285頁/ ¥1.⁰⁰》.
- 佐々木邦『重要語句文例 英語の精髓:The Essentials of English』丁未出版社 1918年3月5日《18×12^{センチ}?/ vi+301頁/ ¥0.⁷⁵》.
- [第一次]『佐々木邦全集』全10巻 大日本雄辯會講談社 第一巻:1930年10月20日/第二巻:12月10日/第三巻:1931年1月1日/第四巻:2月10日/第五巻:3月10日/第六巻:4月10日/第七巻:5月10日/第八巻:6月10日/第九巻:7月10日/第十巻:8月10日.
「月報」の号数は巻名に準ずる.
- 佐々木邦「教壇から創作へ」『文壇大家花形の自叙傳』大日本雄辯會講談社 1936年10月1日 pp.346-363. 雑誌『現代』第17巻10號に別冊で添えられた附録のうち.
- 佐々木邦『豊分居雜筆』春陽堂書店 1941年8月8日《函19.3×13.8^{センチ}/ [8]+348頁/ ¥1.⁰⁰》. 「思ひ違ひ, 言ひ違ひ」, 「國際マーク・トウェイン協會」, 「趣味の遺傳」, 「女の重要性」, 「小さい理想」, 「素人藝雜感」, 「先輩の死」, 「夢を樂む」, 「書物と私」, 「愛蘭ブル」, 「偶然の威力」, 「テーブル・スピーチ」, 「ウエツプスターの記」, 「不當の期待」

「世間と人生」, 「頓智秀逸」他を収録。

佐々木邦 『人生縮圖』 文學社 1946年8月15日 《18.5×13 ㇿ/ 150頁/
¥10.⁰⁰》。「先生」, 「趣味の遺傳」, 「偶然の威力」他収録。『人生縮
圖』は第二次全集に収録されなかった。

佐々木邦 『豊分居閑談』 開明社 1947年9月30日 《18.5×13 ㇿ/ 244頁/
¥18.⁰⁰》。「國際マーク・トウエーン協會」, 「書物と私」, 「ウエッ
スターの記」, 「煙草の思ひ出」, 「テーブル・スピーチ」他を収録。

佐々木邦 『ユーモア百話：English without Tears』 研究社出版 1958年6月
25日 《19×13.5 ㇿ/ viii+198頁/ ¥200》。

佐々木邦 『英米小ばなし』 研究社出版 1962年5月20日 《18.5×13.5 ㇿ/
ix+196頁/ ¥270》。

佐々木邦 『人生エンマ帳』 東都書房 1963年11月20日 《19×13.5 ㇿ/
262頁/ ¥450》。「奇縁」(「國際マーク・トウエーン協會」を改
題)、「不注意一束」, 「頭の中の誤植」, 「M.C.C.」, 「僚友秘話」, 「テ
ーブル・スピーチ」, 「覚え書き」他。

佐々木邦 「清水農園の石川さん」 『主婦の友社の五十年』 主婦の友社 1967
年2月10日 pp.657-662。

[第二次] 『佐々木邦全集』及び「月報」全10巻+補巻5 講談社 第一巻：
1974年10月10日「いたずら小僧日記」, 「続いたずら小僧日記」, 「珍
太郎日記」他/第二巻：11月20日「凡人伝」他/第三巻：12月20
日/第四巻：1975年1月20日「奇物変物」他/第五巻：2月20日
「ぐうたら道中記」, 「豊分居雑筆」, 「世間と人生」他/第六巻：3月
20日「地に爪跡を残すもの」/第七巻：4月20日/第八巻：5月20
日/第九巻：6月20日「苦心の学友」, 「村の少年団」他/第十巻：7
月20日「赤ちゃん」, 「心の歴史」, 「豊分居閑談」, 「人生エンマ帳」他
/補巻一：8月20日/補巻二：9月20日/補巻三：10月20日/補

卷四：11月20日「おてんば娘日記」他／補卷五：12月20日。創作作品については原則としてこの全集で参照したので、その際には引用が新仮名遣いでの表記になる。「月報」は1～15冊あり、号数は第一巻～補卷五の順。

鶴見俊輔 「第12章 佐々木邦：小市民の日常生活」『アメリカ哲学：プラグマティズムおどおどお解し、発展させるか』世界評論社 1950年1月10日 pp.226-265.

鳥越信 「佐々木邦：聞き書」『日本児童文学史研究』風濤社 1971年1月31日 pp.180-188. 【初出】：『日本読書新聞』第1112号 1961年7月10日 第5面.

中垣恒太郎 「『トム・ソーヤー』のユーモアはいかに移入されたか：佐々木邦によるマーク・トウェインの翻訳」『ほらいずん』第34号 早稲田大学英米文学研究会 2002年3月1日 pp.28-43.

^{にしごき}西寄康雄 「佐々木邦の児童文学：『いたづら小僧日記』研究」『国際児童文学館紀要』国際児童文学館 第13号 1998年 pp.49-69.

林幸子 「日本におけるマーク・トウェインのユーモアの受容：『トム・ソーヤーの冒険』の翻訳を通して」『埼玉県立大学紀要』埼玉県立大学 第15号 2013年 pp.73-78.

堀部功夫 「『いたづら小僧日記』の原書」『近代文学と伝統文化：探書四十年』大阪：和泉書院 2015年5月25日 pp.131-152. 【初出】：「『いたづら小僧日記』の原書」『同志社国文学』同志社大学国文学会 第35号 1991年3月 pp.92-103.

松井和男 『朗らかに笑え：ユーモア小説のパイオニア佐々木邦とその時代』講談社 2014年7月17日.

丸谷オ一 「男の小説：①佐々木邦の戦前日本」『別れの挨拶』集英社 2013年10月10日 pp.224-235. 【初出】：『オール讀物』文藝春

秋 2012年1月 pp.78-84.

やまつたまさみ

山蔦正躬（篇）『佐々木邦の手紙』 山形：みちのく豆本の会 1971年6月.

渡部昇一 「佐々木邦」『随筆家列伝』 文藝春秋 1989年4月30日 pp.5-

44. 【初出】：「随筆家列伝1~7」『諸君』 文藝春秋 1986年1月~8月.

渡部昇一 「戦禍に燈るユーモア」『青春の読書』 ワック 2015年5月29日

pp.79-99. 【初出】：「書物ある人生4」『WiLL』 ワック 2011年10

月 pp.290-301.